

020794-000-8

特18-103

信仰の友

植村 正久/著

M31

ABI-0620



信仰の友

植村西之著

信仰の友

東京 信仰の友 書店

信仰の友巻首に記す

一此書の印刷に附せられしは友人某々氏等が福音新報の中より數篇を抄出して之を印行せんことを求められしに由る。

一余は一とわたり之を閲したれど、多忙にして修正を加ふるの暇なかりしかば、福音新報に出だせるまゝにて印刷することとはなりぬ。

一本書收むる所余の筆に成りしものもあり、余の意を承けて社友の書きしもあり、中には口授のまゝを筆記せしもあり、故を以て文牒一ならず、全牒の構造蕪雜極まれるは遺憾千萬なり。著と言はずして、編と謂ふも之がためなり。

一毎週發行の新紙に急遽書き綴りたる文章を載せしことゝて、思想上負債ある方々を一々記慮すること能はず。然れども、ウリス、ロウテ、チヨルチ等には最も多く負ふ所あり。



一片々のうちに見ゆるおもひやりは他人の文章なるを如何にして紛れ入りけん。校正の際心付きたれど印刷者の迷惑を思ひ遣りて其のまゝになし置きぬ。此類尙ほ外にもありぬべし。

一此書は余の好んで公けにせしものに非ぬと信仰の友として或ひは少補なきに非るべし。

福音新報社に於て

明治卅一年三月十九日

植村正久

信仰の友

目次

精神の高雅心志の獨立	一頁
人は平等なり	六
靈なる事物と有形なる事物	一三
眞正の義捐	一七
人生の三大勢力	二三
支那日本の相異なる點	三八
人力と神力	四二
生活の兩側面	四七
枯木の花	五三
見よ神は大なり我等之を知らず	六一

祈り……………六六

深き所に漕ぎ出でよ……………七四

基督教徒の師道下……………七九

明治廿九年のクリスマス……………九三

神子成人の理クリスマスの教訓……………一〇六

基督の謙遜……………一二二

ゴルゴタの丘……………一二五

主の復活と人生……………一三三

聖受難週所感……………一三八

復活節……………一四四

復活の信號……………一五二

喜ばしきイーステル……………一五六

基督の復活、人生の復活……………一六二

基督對懷疑者……………一七八

片々

靈なる光……………一八八

をもひやり……………一九一

人生の秘義に接して謙遜を學ぶ……………一九四

顯はれたる信念と潜める信念……………一九六

頑是なき我ら……………一九八

活計に終る生涯……………二〇〇

我らの同盟は誰なるぞ……………二〇一

病軀と熱信……………二〇三

宗教上の無頓着……………二〇四

四文八文の帳面……………二〇六

福澤諭吉先生の道徳説……………二〇七

持18
103

1 精神の高雅、心志の獨立

信仰の友

精神の高雅、心志の獨立

オールドモラルズ、幽雅、静閑の山水を離れて、暫らくロンドンの市中に居住せしことあり。滿都の紛擾人は皆在するに似たり。區々たる事物は詩人の意馬を驅け之をしてたゞ風塵の中に老しめんとするに似たり。彼は此際、所懐を述べて曰く、俗塵界の事物に圍繞せられつゝも、常に能く最大なるものを記し、如何なる境遇に於ても、其の感覺を胸底に蘊蓄せんことを務むと。

此の偉人は、居常天地の最大なるものに接するの修行を怠らざりき。是を以て、其の心胸愈よ獨立して高潔なる域に進み、方寸の海平和を亂さるゝことなきを得たり。吾らの世に處するまた斯の如くなるべし。精神

- 事業と信念……………二〇九
- 仁禽獸に及ぶべし……………二二二
- いかで之を傳へざるを得んや……………二二四
- 思想を費すに及ばざる宗教……………二二六
- 二種の交際家……………二二七
- 時としては仰ぎ瞻よ……………二二八
- 禮拜して敬肅の念を養ふべし……………二二九
- 祈禱……………二三一
- 感謝せよ……………二三三

を最も高く且つ大なる所に置き、人事紛擾の波及すべからざる點に立ち坦懷以て利害得失哀歡苦樂を觀察するの心懸無かるべからず。然らずんば精神の獨立得て保つ可らず。其の弊や進退去就毫も風に吹き去らるゝ糺練と異なるものなきに至らんとす。譬乎物者常而動、况逢變乎安于地者雖逢變不動、况常乎、是故於所止、不可以不知止也、とは吾らが王陽明の徒に學べる語なり。變化定りなき物に繋がるゝ乎、將た地の安固なるが如くに永在不變なるものと結ぶ所ある乎、此の問題は即ち道を得ると獲ざるとの分るゝ所に非ずや。

宗教の要はつまり此の問題を決むるを以て其の目的とす。物に束縛せられず世の利害榮辱に屈托せずして歡喜の泉常に胸中に湧くを期するは宗教の志願なり。曰く貧しきものは福ひなり、哀しむものは福ひなりと、貧富哀歡の境遇は其の差異天地よりも甚だしいへども、之に共通する一種の幸福在りて存するを宣傳する此れ山上垂訓の要領天國

の福音に非ずや。

此の福音を悟了するまでは精神獨立の基礎定ることなし。此れ宛かも柳條に繋がれて、中空に懸りながら身の動かざるを期す可らざる如し。たゞ商業にのみ繋がるゝ人は獨立の精神を以て商業を營むことを得ず、たゞ政治にのみ心專らなる人は不屈不撓獨立不亂の精神を以て國事を經營すること能はざるなり。意ふに此の福音を受容せずして世に立つは砂塵の上に家を作るに等し。風吹き、雨降り、大水出で、流れ覆らざるを保障すべからず。また愚の至りに非ずや。花瓶に挿したる花の早咲きを爲すが如く暫らくは盛んなりと見ゆるも、元來根なきものなるが故にたゞ短期にして終るのみ。然れども天國の福音は常在の平和を與へんと欲するものなり。

使徒パウロは此の福音を信じ、安心立命の地に進みて、世上の事物に束縛せらるることなく、真に精神上の獨立を得たる人なり。其の言に曰く、人

を感はずもの似たれども眞實人に知られざるに似たれども人に知られ死にたるもの似たれども生けるもの責を受くるに似たれども殺されず憂るに似たれども常に喜び貧しきに似たれども多くの人を富まし何も有たざるに似たれども凡ての物を有てり(後哥林多六の九) 一)又哥林多の人妄りに黨派の争を事とし區々たる差別に汲々として已まざるを戒め大いに基督教徒の精神的獨立を主張して曰く然れは誰も人に誇る勿れ萬物は爾曹のものなり或はパウロ或はアポロ或はクバ或は世界或は生或は死或は今のもの或は後のものは是れ皆爾曹の屬なり爾曹は基督の屬基督は神の屬なり(前哥林多三の二一—二三)憂ふるに似たれども喜び貧しきに似たれども多くの人を富まし一つの物をも有せずして凡ての物を有するに異ならず精神の獨立此の境に達す此を名づけて眞個の英雄と稱するを得へし特に注意すべきはパウロの奉する所の福音は赤子の如き謙遜の心とるに此の勇

猛不屈の精神を養はしむるとなり凡そ靈に屬けるものは人に辨まへ知らるゝとなしと雖ども萬事を審判く力反りて餘りあり物に繋がれず世上の利害に役せられず是等よりも優りて迥かに善きものを認め常に思之に注ぐものは自づから事物を正當に識別するの力を有するに至る是に於て我等はエホバを畏るゝ實に智の本たるを知るなり蓋し人心の明は此邊より生ず未だ此の獨立を成就せざるものは智者といへども昧し詩人ウオルゾウ オルスは最大のものを中心懸けて萬事を審判するの力を養ひしが故に精神の獨立を保つとを得しなり然らざりしならば彼は左顧右眎一々世上の波瀾に動搖せられ其の過敏なる神経は常に社會百般の出來事に驚かされて少しも己が本領を保つとを得ざりしならん否を保つべきの本領をも有せざりしならん

人間の平等

吾國に政論大いに興り、西洋流の自由民權說初めて天下に唱へられしは僅かに數年前の事なりしが、今は其らの議論も陳腐に屬し果ては世間また顧みるものなきに至れり。スベンセルの社會平權論が政論家のバイブルたりし時代は今後夢にも見ることを得ざるべし。此は一には世の中の進歩せしに由る。また國民がをし並べて時事問題にのみ目を着け、政治の哲理社會發達の原則人文開進の主義などに頓着せざる氣風となり行きしも他の一原因なるべし。前者賀すべし、後者は邦家將來のために識者の警戒すべき所ならん。

流行の時過ぎし今日平等などの文字を列ねるは心なきに似たれども、此の陳套なる題目に就きて倫理宗教の一端を窺ふも決して無用の業

に非るべし。吾らは取て通例の政論者流とも此ら議論を上下せんと欲するものに非るなり。

佛蘭西革命の如きは此の抽象的平等論を基として起れり。佛人は貴族門閥の賤辱せる時弊に懲り、社會の不均甚しきを憤りて他の極端に奔り、人類平等と云へる其の名美にして、其の實思ひの外に空虚なる説を唱へしなり。其の後に至りても此の議論に同じ熱心に平等説を主張するものなきに非ず。然れども人類平等と云へる觀念ほど事理に適はざるものは天下に其の比を見ざるべし。人心の異なるは猶ほ其の面の千差萬別なるが如し。其の智愚賢不肖醜美善惡の懸隔實に甚しきものあり。人間の皮相を見しのみにては斯の如し。心の隱微をも掌を指す如くに看破せる上帝の前に於ては、世上の不均人類の不平等意外に甚しく夥しきものあるならん。或ひは千金を受け、或ひは二千金五千金を受け得て世に出でたり。此れ決して主の譬喩のみならず、宛然活世界の

寫生圖に非ずや。此を以て左しもに一代を風靡して天下に轟きし人類平等説も頓がてポルクの堂々たる言論ペンタムの緻密深刻なる批評コルリツヂの典雅深遠なる駁議傍若無人なるカアライルの譏諷的痛罵に遭ひて徹座に打ち摧かれ訖んぬ。

然れども人類平等説豈に悉く誤謬ならんや。其のうちにもまた之が基礎として一大真理の存するに相違なからん。此の隠蔽せられたる真理は平等説の生命にてありき。其の能く人情に訴へ強大なる援助を天性より獲來りたる所以のものはい。此の真理あるがためのみ吾らは之を發揚して其の光りを輝かさんと欲するの點より人類平等説の速かに放棄せらるべきものに非ざるを認む。純精なる黄金を含有せる土塊は輕々しく棄てらるべからざるに非ずや。

蓋し人類平等説の根底に横はれる一大真理とは、人は皆な萬物の首長として靈妙なる資を具へ絶對なる價值を有するものなりとの觀念に

外ならざるべし。支那の孟子が性善の説を唱へ、人皆な堯舜たるを得べしと論じたるは、人類平等主義の精髓を得たるものなり。妓王妓女清盛の寵を佛御前に奪はれしを慨き、斷腸の懷を今様に述べて曰く、

ほどけも本は凡夫なり。我らもついにほほどけなり。同じ佛性具せる身に隔てあるこそ悲しけれ。

と三返かへして舞ひ畢りしときは、ルウサウよりもベインよりも勢ひ盛んなる平等論を以て彼の壓制專横の君主なる太政入道を感動したるならん。蘇國吠畝の詩人ポルンズ其の友人ヘンデルソンの死を悼み其の徳を稱賛して彼は直接に全能なる神の手より勳章を賜りし紳士なりきと絶叫せり。人爵の光を奪ふ天爵の盛んなる榮譽匹夫ヘンデルソンの身に存するを讚嘆せる詩人の胸中を感動せしものは人類平等主義の基なる此の大真理に非ずや。マシウアルノルドが無名の碑の歌

“Ask not my name, O friend!
That Being only, which hath known each man
From thh beginning, can
Remember each unto the end”

あゝ無名の碑を遺して死せし人は其名人間に知られずといへども能く上帝に記憶せらるゝなり。宮の貴人も苦に伏す賤の夫も同様なる價値を有すること以て見るべし。此の貴賤同一の價値に對しては人爵の差異太陽に對する炬火の如く有れども無きに異ならず。哲學者カント此の天爵を以て獨り絶對なる善なりとは論じたり(倫理哲學第一章)和睦を求め人を愛するものは天に在る神の子と稱へらるべし。人類は一人として神の子に非るものなし。吾らは堯舜を標準として人の價値を品定するに非ず。また虛無寂滅の主義に迷ひ、厭人厭世の左道に誤まられたる佛の涅槃より人の尊貴を割り出さんと欲せざるなり。たゞ新ら

しき人類の創開者なる耶蘇基督と其の顯彰せる萬民の父の前に於ける人類の眞面目に由りて、其の價値を量らん(此のこと若し成るべくば)と欲するのみ。此の故に雅各は神の形に像りて作られし人を重んずることの容易ならざるを誡めたるなり(第三章九節)。此の絶對なる價値を發揮し、此の上もなき善を顯彰して以て光榮を上帝に歸するを人類の最大目的とす。即ち才を磨き、徳を建て、人物の品位を高尙にし、略言すれば凡べて人の人たる道を盡すべきは、凡そ世に生れたる各個人の義務なりとす。既に天に對して此の義務を負ふ。此に於てか所謂權利なるもの生ず。何となれば吾らは世に在りて此の義務を全うするの自由を享け、之に相當するの餘地を興へらるべき筈なればなり。吾が身を動かさし、吾が舌を振ひ、吾が筆を走らせ、吾が道を信じ、吾が禮拜を行ふの保障なくんば、何を以て能く、此の天分の義務を全うすることを得んや。公共の利害を慮かり、天下のために經營し、己むなくんば、人類のために身を犠牲

にするの機会を與へらるゝは政事に參與するとに非ずや。參政の權を獲ざるは、此の道德の高尙にして且つ廣き領分を取り上げらるゝものなり。參政の權利を求むる、たゞ人民經濟上の利益を圖かるに在りて爲すものは頗る陋なりと謂はざるべからず。曾て赤貧の士あり、功に由りて勳章を賜はりしとき、嘆じて曰く、我れ之を佩用すべき衣服を有せずと、此らの務義に伴ふべき權利なくば人類の有様宛がら彼の貧士に異なるものなからんとす。

靈なる事物と有形なる事物

神に關する事物は何となく不確かにして存するが如く、存せざるが如く、其の有無茫乎として雲を捉ふるの感あり。有形の事物は然らず。論よ

りも證據其の存在は確實にして疑ふことを容さざるなり。然らば神は不確かにして金銀木石は之よりも確かなるか。淺く之を考うるときは此の疑ひ頗る道理ありと見ゆ。然れども細心之を察すれば、事實は反つて之と異なるものを見る。何を以て然か言ふか。

吾人の認識十分ならざるを以て、物の存在不確かなりと論結するは速断の甚しきことなり。何となれば、物確かに存在すと云へども、吾人之を認識せざる場合少からざればなり。譬へば此に物あり、吾人の周圍に充ち塞がりて之を知覺すること甚だ難からずといへども、之に意を傾むけ心を用うるに非れば、何時までも之を知らずして止むべし。所謂心此に在らざれば、見れども見えず、聞けども聞えざるもの此れなり。馨香馥郁として薫ずれども、故らに鼻を掩は、以て吾人の心意を動かすに足らず。斯くては馨香も存することなきに同じからずや。見るべし、有形界のものにても、其の存在するのみにて能く吾人を感動し、其存在

を明示すると能はざるなり。五官に觸るゝ事物といへども、之に相當せる條件を履むに非れば、吾人得て之を知覺すべからず。上帝のたまはれたるかなり、之を確かに認識せんには、之に適するの條件を具ふるを要す。吾と神との間に一種の障壁を作り故らに心を他の事物に専らにした。い現在の利害に意を注ぎ、富貴榮達のために先入爲主の權を掌握せられれば、幾萬年を経とも上帝を覺るべからざるなり。寶の存する所に心もまた往て止まるべし。地に心を置いて徒らに天の見えざるを嘆息するは愚痴の至りに非ずや。鳥が白晝眠を睜るも、能く物を見ることなきと何ぞ辨ばん。パウロは斯る事實を指して、常に學べども眞理を識るに至ること能はずとこそ評せしならめ。

吾人をして一旦理想の眼を啓き、靈性の潛勢力を振起し、高所聖所を仰がしめよ。其の感覺は有形の事物に比して一層深く且つ切なるものあらんとす。吾人輒すく彼の外誘の私に率れ、邪智を逞うし、汚慾を恣にし、

心氣を八方に散逸し、靈性の眼を杜く。此の故に上帝存在の確實なるを感激せざるなり。人心愈危うく、道心愈々微なり。是を以て禮を設け、式を行ひ、紀念物に接し、以て靈性の痴鈍を警め、散亂せる心を神聖なる事物に集注せんとを圖る。此れ亡友の寫眞を取り出で、懷舊の情を催すに異ならざるべし。

神は活ける存躰なり。愛に溢れたる心性なり。靈と靈相接し、愛と愛互ひに交感し、心と心相親しむに至りては、心と有形なる事物と親しむに比してはるかに密切なるものあるを疑はず。

つくく／＼と獨り向へば吾が身さへ

月の中なる心地こそすれ

吾人の心情外界の事物と交親すること斯の如し。其の然る所以を尋ねれば、月を以て單に月なりとせず、花を以て單に花なりとせず。月に由り、花に因みて、情を人間に輸る一大心靈の存するものあるを髣髴として

有形無形の間に瞥見するを以てなり。此の消息を吾人に傳ふるは東西古今の大詩人に非ずや。たゞ花のみならば、たゞ月のみならば、何を以てか能く斯の如く相親しむことを得んや。月花の最も近く我に接するは無形なる心靈の力を所依とするのみ。左れば稍や冷かなる自然をさへ、其のインスピレーションに由りて、然く吾人に接近せしむる彼の在天の父こそ、日よりも月よりも、花よりも鳥よりも最も切に又近く精神を感激せしめ、心胸を動かして、其の靈活なる存在を顯彰するものにてあるなれ。左れば神を感ずること物を感ずるよりも深きものありと言へるを慥しむ勿れ。

吾人有形のものを感じること明らかにして、神を感ずること臘月夜に於るが如き想ひあるは、其の理由神に存せずして、原因は我の方に在り。兩者の差異此の如くなるは、品性の如何に職由けり。故に基督の山上垂訓に云はずや、心の清きものは福ひなり。彼等は能く神を視なるべけれ。

ばなりと。智識の論理如何に精密なるも、心情の論理別に存立するを忘却するときは、靈性上の事物すべて暗中に物を探るに等からんとす。詩人シルレル善く此の意義を述べて曰く、智者の知力得て見ざる所の事物も、赤子の如き心は業に已に天真爛漫の間に之を實行しつゝありと

献金の道

一週の首の日ごとに爾曹おのく其得るさころの利に預ひて之を家に蓄へ置けこれ我が到るさき始めて出すこと莫らん爲なり(前哥林多十六の二)

金銀は其の所有者を高貴にし、また之を卑しくするの力あり。之を用ふるの方法によりて、或はサタンサタンの群に入るべく、或は以て天の使の列に

加はることあり之を如何に蓄へ、又如何に用ふべきか、是れ我等の研究すべき所なり。

保羅は哥林多人に向ひ義損金の理想を示し、彼等がその財によりて貧くなり、これを用ふるによりて、聖徒たるの道を教えたり。今哥林多前書十六の二節に於て、彼が説き示せる所を分解するに、

第一、多少に拘らず財を投し、義の爲めに金銀を擲つは、大凡ククリスチヤノたるもの、義務なり。我等が己れの慾を充たさん爲め、其他世上普通の目的の爲めに費せる金額を以て、これを公共の爲め、義の爲めに用ふるものに比ぶれば、前者の甚はだ多くして、後者の尤も慙きを知るなり、人類が額に汗して蓄ふる所の金銀、何れの處に向つて流れ行くやを見れば、世の道徳は何れの程度にあるを知ることも難からざるなり、金銀を蓄へ、之に由て義を行ひ、道を進め、世を救ふの材料に供する程、美はしきとはなかるべし。我等は力めて無用なる失費を省き、華美の風習を廢し

て財を正義の溝路に流出せしめざるべからず。斯くの如く用ゐらるゝ財を積むは高尚なる道徳なり。之れが爲めに質素儉約を勉むるは、仁義の殊勝なるものなり。斯の如く之を用ゆるも亦甚だ貴きとなり。人おのこの義の爲めに財を投ぜざるべからず。

第二、天地は秩序に随つて運行す。上は星辰、下は山川に至るまで、一として規律の整然たらざるものなし。自然は熱病の如く、癡狂の如く、不時に働き、秩序なくして動くものにあらず。日月の盈昃、寒暑の來往、睡眠の間、飲食の度に至るまで皆犯すべからず、破るべからざるの順序あり。風は氣儘に吹くといへども、靈界の事又規律なくんはあらず。規律なくして飲食するもの、忽ちにして病を得るが如く、規律なくして祈るもの、及び教會の義務を盡すものは、其の信仰を傷つけ、その靈性の發達を害するに至らざるもの、殆んど稀なり。義捐の事、また然り。有るが儘に出し、心の向ふに隨ひて與へ、少しも一定の規律を設けざる時は、遂に適當なる

献金をなすとを得ずして止まんとす。

故に保羅は一週り首の日ごとにと教へたるなり。驟雨の如き献金は、或場合に於て害をなすともあらん。凡そ基督教徒たるものは、安息日毎に多少の献金をなすとを心掛けて、秩序的に義の爲めに財を投せざるべからず。献金に規律を設けると然らざるとは、一年の後に至り、非常なる差異を生ずるとならん。基督教徒をして其飲食睡眠に規律ある如く、献金にも儼然たる規律を奉ぜしめば、教會の維持傳道上の運動すべて今日、の如き有様にはあらざるべし。

第三、おの／＼その得る所に隨ひて財を家に蓄へ、献金をなすこと肝要也。己に家に蓄ふるといふ、以て平生の心掛容易ならざるを證するに足れり。戸口に錫杖を鳴らす旅僧の來るに遇ひて、遽かに思ひ立ちたるもの、如く、金を投じ、犬馬に物を與ふるが如く、何の心もなく財を投ずるは、基督教徒の耻づべき所なり。主の事業の世に行はれんが爲め、道義を

擴張し、天國の進歩を圖らんが爲めに、平生神に祈り、深く思ふ所より節儉して貯ふる所の金は、此世の金にあらず、實に天國の金なり。其の貴きと知るべきなり。たとひ厘毛の微といへども、主は彼の養婦のレフタと共に大いに之を稱賛し給ふとならん。爾は幾何の收入ありて幾何の財を義の爲めに用ふるや。汝は飲食遊戯、學問の爲めに幾何の財を消費し、又道の爲め、救世の爲めには幾何を與へつゝあるや。只與ふるを以て足れりとするなかれ、その汝の力と平均して宜しきに適ふや否やを思はざるべからず。此を以て見れば、千金を出すもの、尤も醜き守銭奴たり、厘毛を出すもの尤も大ひなる仁者たるとなきにあらざらん。學問の爲め、保義の爲めなどいへるとは、美はしきとの如く聞ゆれど、之れが爲めにのみ、莫大の金を費し、義の爲めに出すもの、甚だ少額なるものは、飲食色慾のみに耽るものと其差異五十歩、百歩の間のみ。これ皆同一に利己主義の奴隷たるを免れず。讀書講學を以て己れの良心を痴鈍にし、世の毀譽

を瞞着するもの尠からず、我等は利己主義の讀書講學、攝生保養を攻撃するの必要あるを見る。

第四財を投ずるものは、之を無心にする勿れ。思慮を以てし、祈りを以てして、献金せよ。思慮なく、祈りなきの金銀は如何に巨額なりとも土芥を堆積したるに異ならず。世人は心を用ゐず、神の祝福を求めず、基督と共にするの同情を人の爲めに催ふすなくして、狼りに献金するにより、其の得べき利益を得ず、天國にまで通用すべき財も空しく世間の兩替屋にのみ委すると少からず。若し正しき心を以て常に献金するとを勉めなば、或時は百の説教千の勸告を聞きたる時よりも、其の信仰の發達するを見ることならん。無心なる献金、祈りなきの義捐は、すべての罪惡不道徳と一樣に貴かるべきものを卑しき地位に棄て置くとなりと云はざるべからず。

金銀は道德の符號なり。忍耐、節儉にあらざれば之を得ると能はざれば

なり。マリヤの漑げるナルダの香膏も金銀を以てせざれば之を買ふこと能はず。金銀は己れの自らに在らざる所にも自ら其場に臨めると同じく善を行ひ、義をなさしむ。金銀は人をして一躰分身の魔術を行はしむ。昔直江兼繼は銀錢を汚れたりとして手を之れに觸れざりしといふ。是れ基督教の精神を以てせざるが故のみ。思慮深く祈りと共にする善財、献金皆共に美はしきものにて、之を仁義の化現なりとするも不可なかるべし。我等は世人がこの金銀を貴ぶの道を學ばんとを望む。

人生の三大勢力

耶蘇曾て其の門人等とエリユを過りしに雲霞の如き群衆之に附き従へり。顧がて城門に懸りしとき名をバルテマイと呼べる密者路のほど

りに坐して乞ひ居たりしが、今しも耶蘇此所に來れりと聞き、聲を發ちて呼はりけるは、ダビデの裔なる耶蘇よ、我を憫めど、衆皆之を禁めて緘黙れと云ふ。然れども彼は益呼はりて止まず。那蘇立ち止りて之を召ばしむ。人々忽ち前の程とは打つて變り、善者に向ひて心を安んぜよ、主の爾を呼べるなりと云ふ。善者其の表衣をかなぐり棄て、起ちて耶蘇のもとに來る。耶蘇答へて云ひけるは、爾我に何を爲れんと欲するや。善者云ふ、主よ、見えなんことを冀ふ。耶蘇之に云ひけるは、往け、爾の信仰爾を救へりと、此に彼けたゝちに見ることを得て、耶蘇に従ひ往きぬ。馬可十の四六以下、子細に此の物語を檢し來れば、人生の實際之に類するもの少からず。意ふに、ペルテマイの身上は、人生を支配する三大勢力を表示せり。試みに之を略説せしめよ、身の光は目なり。目にして光を失はば、其の暗きこと如何ばりぞや。朝出る日も、善者のためには徒らに輝やくのみ。春の花も空しく笑ふに過ぎず。花ならば手に取りて見ん、今日の月と詠

じけん心のうちぞ哀れなる。ペルテマイは斯る不幸なる身を重やかに背負ひつゝ、左らぬだに辛き浮世の波間に漂ひぬ。余が識れる人志尋常ならず、氣力甚だ盛んなりしが、事業半途にして、雙眼明を失ひぬ。彼は之がため慷慨嗟嘆遣る方もなく、一夜人の眠れるを窺ひて自ら短銃の煙となりて亡びにき、盲人の悲境察するに餘りあり。

生存競争は世の習ひなり、新橋のステーションに下車する人々を見よ。彼らが東海道を汽車にて越ゆる徒然に、四方八方の物語をなしつゝ、狎れ親しむ状親戚も之に過ぎじと見えたり。然れども旅の終局に達するや、前後を争そひて、我れ勝ちに出口を求むる躰容は、左てく、輕薄の絶頂に近し、人生の行路難また之に異ならず。個人主義の横行する世の中は、カインこそ得意ならめ我豈に兄弟の衛士ならんや。とは、人の口々に罵る所なり。人を見れば敵なりと思へど、世渡りの經驗家は教へたり。果して然らば、人生はたゞ油断の出來ざる所、片時の安心もなかるべし。然れ

ども天父に感謝せよ。險坂の旁り魂驚かす九折にも躑躅百合花は咲きにほへり。我意のみと思ひたる世にも己れを忘るゝ家庭はありにき。生存競争に他事なしと見し所にも斷金の交り厚き友の情温かなり。妄りに人生を戦ひの街に比する勿れ。愛の泉は所々に湧き出で、行き艱む旅人の安慰どはなりぬ。たゞ家庭朋友のみにあらず。人誰か惻隱の情なからんや。人情屢利己の念に勝ちて慈善の事實となりしもの少からず。パールテマイは斯る不幸なる身上なりしが。世間は幾分か之に憫みを加へたり。彼は日ごと城の門に出で、物を乞ひぬ。往來の人にしていさゝか情の露を漑ぎしもの多かりけん。彼は辛くも世に生存ふることを得たり。此所はたゞ個人主義の世界にては有らざりけり。吾等は社交的の動物なり。鳥の虚空に翔けるが如く、我等は社會の間に生活しつゝあり。社會は我等を奨勵し、吾等を助け、また我等を妨げつゝあり。或るときは之がために精神界の死をも遂ぐるに至る。實に社會の感化は人生の

一大勢力なりと謂はざるべからず。之を替者パールテマイの事實に徴して、社會及び個人の關係を明かにし之に對する我等の覺悟を定めざるべからず。

パールテマイは世人の扶助を被ふりたり。彼は之が爲めに墮落せんとせしか。進歩せんとせしか。此れまことに切要なる一問題に非ずや。世に扶けられて、精神の健全を維持せんこと極めて難し。己れを輕んじ、且つ靈性の事に心懸薄き徒は社會の爲めに己れの所在をも失ふに至らんとす。然のみならず。世はパールテマイに其の最も渴望するものを與ふることも能はざりき。往來の人々は僅かに銅錢の類ひを之に惠たりしのみ。然れどもパールテマイは最も切に目の見へなんとを求めしなり。人事および斯の如くならぬもの少し。あゝ世界はサマリヤの婦の日毎汲に疲れし井の如きに非ずや。之を汲みて活ける泉を搦せんと欲するも力及ぶべからず。施與の衣服錦を重ぬるにせよ。惠まれし食物充ち足るにせよ。

パルテマイの心には尙ほ飽き足らざる所ありしならん。功名榮達にあ
 くがれて、人間を頼みとするのみにては、何となく本意に背けるの感無
 んくば有らざるなり。胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢ふ。たゞ神を愛する
 に由りて満足を得ん様に造られし人心の至情は塵土に安んずるを得
 ず。鐵相ヒスマルク此の程人に懺悔して曰く、余が名聲の大なるは自ら
 も知る所なり、然れども此の大なる名聲を以て自から幸福を感じた
 るは、一生の間僅々二十四時間あるのみと。此の懺悔近刊の國民の友に
 も見えたり。石火電光朝露の事物豈に能く人の心を慰さむるを得んや
 社會は高貴なる冀望に應ぜざるのみならず、人ありて望みを高き點に
 注げば社會辱之を償りて百方其人を妨害せんと試みるとあり。社會は
 保守的なり、敢て新機軸を出すことを容さず。社會は己れの好尚を摸型
 として、一個人を形成せんと欲するものなり。進歩主義の人破天荒の事
 を試みんとすれば社會即ち烈火の如くなりて之れを償はらんと

す。唯々諾々其の與ふるものにて満足するときは佛の慈眼を以て我を
 見る。然れども之に背きて自家の理想を主張せんとすれば忽ち閻魔羅
 刹の相を現じて我を呵責迫害すること甚だし。例之ばパルテマイ城門
 の袖乞に満足せずしてナザレの耶穌に呼ばれば慮外なり、推參なり、緘
 黙れど口々に叫びたる如し。社會は専ら寄生物を愛するに似たり。故に
 仲尼は陳蔡に困しみ、卞和は玉を献じて刑られ、パウロは耶穌に従ひて
 同志に悪れたり。豫言者の故山に尊からざるも之がためなり。古へより
 義を唱へ、道を宣るの君子多くは厄に遭ふもの蓋し此の事情あるを以
 てのみ而して警者パルテマイは人生の一大勢力たる社會に對して如
 何なる態度を取りしぞ。

其二

一個人と社會との關係斯の如し。社會は猶ほ海の如きものに非ずや。能
 く般を浮ぶるも海なり。之を覆へして、人と貨物とを底の藻屑と爲すも

亦海なり風の吹くに任せ潮の流るゝに随ひて波のまにゝ行くときは舟必らず覆没の憂あらん。個人の世に立つ亦甚だ之と異なるものあらず。唯だ社會の勢力に辟易し、衆人の向ふ所に從ひて進退し、僅かに其の手當てする所を以て満足するときは己れが天分の才を伸し得ず、五十年の生命否な永久の生命までも亡ぼすに至らんとす。吾等は社會に對して大海の一粟に比すべきものなり。天地の悠々たる吾等が生命の迅速なる社會の紛々擾々たるを視れば個人何れに在りや、むしろ世と推し移り、時ととも變化して、空しき勞苦を脱るゝには如かず。由來幾多の英雄其の志を此の墳墓の中に葬りしぞ。人類の進歩は一個人が天下萬衆の怒號嘲罵するにも拘らず斷々乎として己れの本領を守り、己れの確信を主張し、己れの主義を唱へて、飽くまで理想の示す所に向ひて進みしに起由せずんば有らざるなり。碌々世間に追従するものは、世に寸功をも樹つること能はず。生命海の零點、また何の價値も有ること

無けん。神の我を世に降せるは決して偶然ならず、我には我の本領なるもの有るべき筈なり。一寸の虫にも五分の魂ありと云はずや。如何に無學短才なればとて、此の我と云へる城廓をば一步たりとも他人に蹂躪せしむべからず。立法論の著述を以て英國に有名なるベンサム曾つて其の恩人某の事を記して曰く、彼は失望落膽の底より余を引き揚げたり。余は其の獎勵に由りて己れてふものゝ存するを知りぬと。ベンサムの一生は此の開悟に基おせるものに非ずや。

善者 パルテマイ は世人の所謂慈善なるものに露命を繋がるゝに満足せず、耶蘇の至れりと聞きて、此の千歳の一時を失ふべからずと大いに聲を發ちて其の哀憐を求めたり。緘黙れゝの聲喧すしけれども、彼は之を耳にも懸けず。益呼はりて止まず。パルテマイは此所ぞと思ひ込みし事に付きては、敢て他人の毀譽に従ふことを好まざりしなり。一旦耶蘇善者を呼ぶと聞くと、さきには口きたなく罵りし人々も心を安んぜ

よ、主爾を呼べりと言ひつゝ之を祝せり、手を翻せば雲となり、手を覆せば雨となる。世人の褒貶、秋天の變り易きよりも甚だし、紛々たる輕薄、何ぞ頼むに足らん。斯る淺薄なる他人の好惡を標準として、進退を決し、去就を定めなば、淺薄を極めたる生命にて身を終らざるを得ず。ペストスはパウロを狂せりと云ひぬ。耶蘇の親戚は其の舉動を怪しみて、其の精神常ならずと思ひ憐めたり。狂と云はれたれど、パウロは福音を傳へて止まず、精神錯亂すと誤解せられたれど、吾らの主は其の聖なる事業を中止せざりき。此れら二人が世の淺薄なる毀養に頓着せざりしは、人類の祝賀する所に非ずや。ペルテマイは金銀をも鎔すてふ衆口の器々たりしに、惡念せず、またにはかに賛成するが如く見ゆるにも、頓着せず。獨立獨行一意専心、主の掇けを呼びぬ。蓋し獨立自信の意氣如何に盛んなりとも、一心亂れずして、其の志を成すに専らならずんば、何事をも成就すべからず。凡そ事業を成し、其の目的を達せんと欲する人は、我の信ず

る所に任するの獨立心と、もに一意専心の心懸け有るを要す。而して之を成就せんがためには、有らゆる代價を支拂ふの決心無かるべからず。敢て爲ざるを得るものにして、大いに爲す所あるを得べし。敢て棄つる所あるものにして、大いに獲る所あるを期すべし。シイザルは舟を焚き棄て、光榮の最も大いなる戰勝を獲たりと聞く。生きんと欲するものは死す。身を棄て、こそ、淨ぶべき瀬もあれ、捨身と名付くる法を以て對手を仆すは、角力社會の秘訣に非ずや。ペルテマイは耶蘇の聲懸かれりと聞くや、たゞちに其の表衣をかなくり棄て、起ちぬ。日の明らかならんことを望むの情切なれば、其の故障となるべきものは、群衆の輿論をも棄つ。况んや其の表衣をや。彼は惜し氣もなく之をかなくり棄てたり。其の奪ふべからざるの志氣、堅きこと斯の如し。彼が兩目の終に明らかなりしは、宜なりと謂ふべし。靈性の眼暗みて、神を見ることが能はざる人もまた、然かせざるべからず。世間基督教を研究し、其の道に志すもの

に付きて、吾ら最大遺憾とするは彼らが世人の好悪に支配せられて獨立の精神を尙ばざること其の一つなり。彼らが常に貳を持し、手を鋤に着けつゝ、背を顧みて兩可の間に中立し、熱せずまた冷ならず、約めて之を言へば専心一意有らゆる行き悪りを排し、凡ての事情を破りて、ベルテマイの如くせざること其の二つなり。桑の樹より急ぎ下りしザアカイは救はれ、財を失ふに踟躕せる富少年は悄然として耶蘇のもとを去りぬ。無名の指を癒さんがためには千里をも遠しとせず、心の目を開き、無限界の美を見んがためには天下何ものか棄てがたからん。世人が道に進むこと能はざるものは理の徹せざるに非ず、基督教の明らかならざるに非ず。多くは義を見て爲すの勇に乏しく、一意専心衣を脱ぎ棄てて之に至るの意氣なきを以てのみ。

以上論述せし所に就きて社會の力と我なる勢力との關係稍や明かになりぬ。此の二つは實に人生の二大勢力にして、世上の失敗成達は常に

此の二力配合宜しきを得ると否らざるとに在りと謂はざるべからず。然れども此の二つのみにて經營せらるゝは低き生涯なり。吾らは天てふ勢力の存するを忘るべからず。之を忘れて自ら用うるに過ぎたるがため、鄙吝の情懷に胸を塞がれ、大いなる失敗を招きしもの少からず。一世ナポレオンまさに大兵を露國に出さんとす。或人其の不可なるを論じ、天の畏るべきを説きて之を諫止せんと試みしに、帝傲然として言へらく、天は吾が手裡に在りと。おゝ彼は獨立の人なり。其の意氣既に乾坤を呑む。大事を成すの資格に於て獲る所固より少からず。然れども彼は畏天敬神の念を欠きぬ。彼は肅し、謙りて神に頼むの心懸けを有せざりしなり。之がために其の品性にも事業にも蔽ふべからざる大破綻は生じにき。

頭腦を役ひ、手を揮ひ、専ら力を用ゐて、天下の事盡く成就すと思ふは非なり。世界はたゞ力作の工場に非ず。また觀念瞻仰の聖所、禮拜敬事の祭

壇たるを記憶すべし。天助天佑など云へる語は決して無意義のものに非るなり。趙甌北曾つて李白を論じて曰く、杜甫韓退之を以て之と比較するに、杜韓は用力而不免痕跡、而うして李青蓮は不用力而觸手生春。此れ仙と人との別なりと。趙甌北の仙と稱するは所謂天才に非ずや。詩の仙なるものは力を用うること無く、手の觸るゝ所春を生ず。其仙に非ざるものは勉強勞苦して力を用ひ、到底其の痕跡の掩ふべからざるものあり、此を以て知る、人生はたゞ力作のみに非るを。蓋イノスピレオンは吾が力の致す所に非るなり。吾らは危坐正念、自己の力を入れずして、神明の感格に接することあり。百千たび草稿を更むるにも勝りて湖月のイノスピレーションは紫女の源語を成すに力ありしならん。ソクラテスは己れを啓導する神靈を信じたり。大舜は田に往きて晏天に泣きぬ、仲尼は知己を天に尋ねしに非ずや。ハイドンは一曲を作るごとに先づ之を上帝に祈りしと傳ふ。人生は勞作活動のみに非ず、また營養なり修

練なり。靜かに天の物を受領し、恭しく之を融變同化するに非らずんば活動も其の極所に達することを得ざるなり。靜思禮拜は人類の最高本領なり。たゞ世の競争場裡に火花を散らして戦ひ、躍鬼的運動に餘念なく書は萬卷を讀破し、足は名山大川を跋渉して遺す所なきも以て人生の事盡きたりとす可らず。之を耶蘇の性行に鑑みよ。其の事業の偉大悠久なるも其の活動の盛んなるとは天下比類無かるべし。然れども彼は常に祈禱禮拜の人にてありき。路加傳に曰く、耶蘇いのりのために山に往き終夜神に祈れりと。其の平生斯の如し。故に天啓けて聖靈馴鴿の如く之に降下せしも祈りつゝありしときなり。彼の山の上にて、其の容貌とみに變り、面は日の如くに照り、衣は雪よりも白く輝きしとあるも耶蘇が祈りしときに非ずや。禮拜は人性の常道なり。長天敬神は生命の柱なり。希伯來書十一章に列舉せられし名賢巨人は皆な信仰に由りて、其の柄ちざるの聲譽を獲たり。自助奮勵力作のみを以て身を立てんと欲

するものは深く此の事を思はざるべからず。
 替者バルテマイは非常なる意氣を示めし、有らゆる精力を注ぎて耶蘇のまへに出でたり。天國は争ふて取るべきものなりとの一語バルテマイに於て事實となりしを見る。然れども彼が耶蘇のまへに出るや、肅然として容を更め、敢て一言をも發することなく、ひたすらに主の命を待ちしのみ、彼は己れの力を用うべき時と氣を收め、心を平らかにして謙り上を仰ぎて待ち望むべき時とを辨へしなり。たゞ跳り走り、争ひ呼號するのみにては宜しからず。我をして周旋盡力のみ、の世界に住ましむる勿れ。時としては、靜思禮拜の靈境に出入せしめよ。我をして額上に汗を流すのみならず、感謝して袍包を裂かしめよ。我をして人間の應對のみに疲れしめず、屢意氣精神を神と交通せしめよ。敬虔の道は人性の大勢力に非ずや。

人は動搖きて山川の淺き瀬に異ならず。其の罵る聲は百の國語を一齊

に使用したらんが如し。此の間に在りて、一人の替者覺束なくも至誠の聲を揚げて主耶蘇を呼はりぬ。あゝ彼が切なる願は最も明らかに基督の耳に達したり。彼を呼べとの一言にバルテマイは感泣やしつらん。爾我に何を爲られんと欲するやとの御聲に彼は親しく主の同情に接して其の恩愛に由り己に己れの眼は明きらかになりし如き心地やしつらん。往け爾の信仰爾を救へりとの仰せに見えざりし天地は見えたり、天父の恩基督の愛は甫めて肉眼に輝ける太陽にも優りしなり。彼は喜びて耶蘇に従ひぬ。(右の一編ホイドカアベント)

支那日本の相異なる點

西人支那國民を批評して曰く、彼らは散文的にして詩の要素を合むこ

と多からず。彼らは余り普通感覺に支配せらるゝ人民なりと、具眼の人支那の文物を講究して、此の結論に達せざるもの殆ど罕なり。彼らの回顧的なる所、彼らの保守的なる所、彼らの非傳奇的なる所、彼らの唯物的なる所を見れば、支那人の想像力は現今に限られ、成敗に屈托し、普通感覺の重力に抑留せられて、天馬空に駈るの概あるを得ざるなり。彼らは餘りに多く實際的とはなりにき、彼らの儒道はセキユリズムを主張すると過ぎたり。彼らの福音は現世的なり。彼らは理想の要素に於て欠る所多し。彼らをして今少しく剽輕ならしめよ。彼らの壯丁をして少しく夢に動かさるゝの氣質を有せしめよ。之を略言すれば、彼らをして現狀に落ち付かず、頻りと奇遇的の想像を縦にせしめ、銳意して進歩を求めしめよ。故に支那を救ふものは理想なり、健全なる理想は健全なる信念に伴はれざるべからず。

故に結局支那更新の一大要素としては、真正なる宗教を算へざるべからざるなり。

我が日本人民は金錢よりも、軀面を重んずるの風あり。所謂廉耻名聞は大和魂の柱石にてありき。邦人の道德習慣、此の軀面てふ二字に支配さるゝもの幾何ぞや。吾らは此の點に於て、日本魂の短所を發見し、其の理想に遠きものあるを憂へずんば、あらざるなり。然れども、其の金錢よりも、軀面てふ一種無形なる理想上の事を重んずるは、誇るべき所なりと謂はざるべからず。吾が人民に此の意氣の存するは、其の度まで、彼らが非唯物主義なる證據に非ずや。吾が國の人、輕躁を以て天下に知らるゝこと久し。然れども、此の短所の裏面を窺へば、今よりも更に善きもの、存せんことを信ずるの念、勃々禁ずる能はず。善きものを更に善きものをと慕ふこと、極はめて切なる進歩的精神の要素溢るゝを見るべし。是れ危険此の上も無き性質なり。不平も失望も、革命も、社會主義も、輕躁も、失敗も、此の間より、進り出づ。然れども、更新も、進歩も、改善も、健全なる反

動もまた活ける泉の如く此の危巖絶壁の間より流る吾が日本人民は
 現在主義を奉ずるものに非るなり之を手短かに言へば吾らは理想的
 の民に非ずや理想に熱衷する是れ吾が邦人先天的の性質なるにも拘
 らず妄りに過去の歴史を顧み其の成功に慢じ現今の日本に誇るのみ
 にて其の欠點を指摘するを嫌ひ新文物新道徳の加入を忌む徒は日本
 的精神の賊なり世間通常の論客に在りては此の弊聊か容赦すべし然
 れども最も理想的なるべき基督教徒にして國家の歴史にのみ心酔し
 其の既に獲たる譽れに満足し十字架の福音に由りて此の民を罪より
 救ふの必要を説くことを怠たるは此れ天國の主義と日本の國粹とに
 對して不忠なりと謂はざるべからず此の如き徒は二重の非難を免る
 べからざるなり福音新報は常に武士道を稱賛せり基督教徒に非れば之
 を保存する方法なしとは其の常に説く所にてありき然れども世間
 浮薄の徒妄りに之に心酔して進歩の大義を誤らんとするものあるを

見ればセルパンチスの筆を藉り武士道の破綻を暴きて十字架の福音
 を主張するの必要を感じずんばあらず此れ日本の真正なる國粹に忠
 なるものにあらずや吾が邦人の進取すべき前途を暗くし健全なる道
 徳上の不平心を滅却し漫りに理想の夢を破らんとするものは皆な日
 本をして支那たらしめんと欲するの徒のみ(日清戦争最中起稿)

人力と神力

爾等丈夫の如く剛かれ(前番林多十六ノ十三)
 此の譯文少しく穩當ならざるに似たり之を今一段精確に譯出すれば
 爾ら丈夫らしかれよ剛強かれよとなるなり
 丈夫らしかれよと言ふは専ら人の義氣節操に訴へ其の恥を知り面目

を重んずるの志を動かして、悪を去り善を作しめんと欲するの意なるべし。

例すれば昔ヨセフ主人ポテファルの妻に悪想せられて、大いなる誘にかゝりしとき、之を否みて曰く、見よ我が主人家の内のものを顧みず、其の有てるものを悉く我が手に委ぬ。此の家には我より大いなるものなし。又主人何をも我に禁せず、唯だ汝を除くのみ。汝は其の妻なればなり。是れ彼が良心の力により、氣節を勵まし、正義の一念に由りて發したる言なり。人の性もと善なり。誰か方寸の間に靈明の少しも存せざるものあらんや。此の生得の力、大いに人を激勵して、義に勇み善に進ましむると疑を容れず。

然れどもヨセフは更に進みて、我如何で此の大いなる悪を爲し、神に對して罪を犯すを得んやと言ひ放てり。創世記三九の八、九。彼は己が胸中の良心によりて此の誘に克つとを務めしのみならず、人間以上の威光

を借り、其の推奨鼓舞するによりて、己れの精神を固め、義氣を盛んならしめたるものなり。我等の道徳は唯だ自家方寸の力をのみ持みとすべからず、宜しく天道を畏れ、神明を愼み、上帝を敬愛するの精神にも深く依頼する所あるべきなり。パウロが剛強かれと言ひしは、即ち此の事に外ならず、剛強かれとは自家心中より發する道義の力を指せるものに非ず。パウロがエペソの書に(三の一六)其の榮の富に循ひ、其靈を以て爾曹の裏の人を剛健にすとあるに照し合せて、其の眞意を明かにするとを得べし。或は兄弟よ主および其大なる能に頼りて剛健なるべしと言ひ(以弗所六の十)或はイエス、キリストの恩に頼りて堅くなるべしと言ひ(後提摩太二の一)或は我は我の力を予ふる基督に因て諸の事を爲し得るなりと言ひ(腓立比四の十三)或は荏弱よりして剛強せらるると言へる(希伯來十一の三十四)が如きは皆な此の眞理を教へしものならん。諺に曰く天は自ら助くるものを助くと。若し天助を得、神の能を賜はら

んど欲せば、宜しく自らも大いに勵み、憤發して志を堅め、全力を盡して、
 義を行はんと欲するの決心あるを要す、苟くも然かせずして、漫りに助
 を天に求むると稱して、激勵する所無くんば、其の結果唯だ薄志弱行何
 の仕出したる事もなくして、己れのままんとす。然れども唯だ茫々たる天地の
 間に孤立獨行して、己れの道念を保ち、正大の氣を維持せんこと甚だ難
 し。此の際荏弱よりして剛強せらるゝの經驗なくば、道徳上の安危實に
 心もとなきものあるなり。古への義士節操のために、慘刑に處せらるゝ
 に臨み、皇天上帝眼分明と言ひ、天地正大の氣ありと絶叫したるが如き、
 明かに基督教的思想を懐きしには非ずと雖も、畢竟一種の力を、人間
 以上の威光より借り來りて、己れの志氣を鼓舞したるものなり。人間の
 義理に因りて、道ならぬ誘惑を拒絶せるヨセフは、之に加ふるに神明を
 慎しみ、天を畏るとの一念を以て、更に其の精神を堅固にするを得た
 り。蓋し吾人徳を立て、道を行ふの秘訣、此處に存せずんば有ざるなり。

我に非ず、基督我に在りて生けるなりと、是れ福音の興義にして、人生進
 歩の大道に非ずや、基督と一致契合し、之にも死し、又之にも生
 き之にも戦ひ、又之にも勝つと言ふ真理の外、此の如く基督教
 外のものを始めとし、凡て義士仁人の援助たりし人間以上の活力を十
 分に彰はすものあるべからず。パウロは然れど我等を愛める者に頼り、
 すべて此等の事に勝ち得て餘ありと、羅馬八の三十七、左も喜ばしげ
 に絶叫せり。我等は主の晩餐によりて、此の見えざる大真理を表彰する
 の機會を興へらる。基督と我等との間に成立する交通契合の道は、人の
 生命なり、光なり、又途なう徒らに基督の人と爲りを想像して、之を景慕
 し、道徳の模範として、之を慕ふのみにては、此の道を貫徹すると能はざ
 るなり。基督教は現に活き、又今まさに我等の胸中に生存し、活ける同情
 を我等に與ふる基督を信するものなり。一種の基督教徒あり常に模範
 的の基督を説きて、聖晩餐の真理に示されたる基督を説かず、人物たる

基督を信じて、活ける救者なる基督を奉せず。斯の如くんば何を以て能く福音の要領を全ふするを得んや。模範的の基督に頼りて世を救はんと欲するものは、宛がら使徒行傳十九の十三以下に記されたる呪を修せるものに比すべきなり。彼等は悪鬼に憑れたるものに向ひて試みにパウロが宣べたる主耶穌の名を呼びて之を逐ひ出さんと企てしかど、悪鬼に憑れたる人は却つて彼等の上に飛び上り、之に勝て壓伏せければ、之がために傷けられ、遂に裸にて其の家を逃れ去れりと見えたるが如き末路に遭遇せざるを得ざるべし。

生活の兩側面

我は世の光なり、(約翰八〇十二)

爾曹は世の光なり(馬太五〇十四)

基督教は活きて現存する所の基督と一致契合し、其の苦痛と感樂とを分かち、之と榮辱を共にするを教ゆるの宗教なり。約翰傳に記れし所にては、我は世の光なりと言ひ、山上垂訓には汝等は世の光なりとあり。是れ即ち基督自ら光にして之を信ずるものも亦光たる可きを教へしものなり。

或は基督教は社會主義の宗教なりと説くものあり、或は之を個人主義なりと主張するものあり。兩々相異なるが如しと雖も、基督教精神の根柢は此兩主義の一致共存して初めて全きに至れるものなりとす。山上の垂訓を讀みもて行くに、其の起端を見れば全く個人主義に外ならず。曰く心の貧しき者は福ひなり、天國は即ち其の人のものなればなり。哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり、柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ぐとを得べければ也。饑へ渴く如く義を慕ふものは福なり。

其人は飽くを得なければなり。云々一として個人的にあらざるものなし。矜恤あるものは福なり。和平を求むるものは福なりと云ふが如きは、自己を忘れ全く他愛の精神を教へたるに似たりと雖、其人は矜恤を得なければなり、其人は神の子と稱へらる可ければなりと言ふに至ては、亦個人主義の甚たしきもの、その勘定高きと商估も啻ならず、儒者が教ゆる所の陰徳あれば陽報ありと言ふと將た幾何の徑底かある。我がために人なんぢらを責め苦めん、其時は福なりとの最後の一節も亦全く喜び樂め天に於て汝等の報賞多ければなりとの語を以て結ばる。是を以て見れば基督は唯だ神と吾ら一個人との關係を教へ、其の相接近する方法に付て説かれたるものと見ゆ。然らば基督教は唯だ個人主義のみのものなるか。何ぞ夫れ然らんや。我等は亦その社會主義の教なるを見る。

故に基督更に進で教へて曰く、爾等は地の鹽なり。世の光なりと。此に至て基督教の社會的精神初めて顯著なりと謂ふ可し。吾人は基督と自己の關係を密にし、謙遜温良慈愛等に於て之と一致し以て地の鹽たり。世の光たらざんばあるべからざるなり。

燈を照して斗の下に藏すものなし。燭臺に置きて家にある諸の物を照さん。蓋し光は既に他愛的のものなり。光明遍照十方世界と言ふが如く、限なく己れを撤布するを光の性質とす。太陽は常に光と熱を吐くのみ、幾百萬年の間少しも之を他に求むるとなし。自己の光熱全く失はるゝに至らんまで他に與へて息まざるなり。基督は神の榮光を棄て、僕の貌を取り身を犠牲にして人類のために與へたり。是れ實に世を照す眞の光にあらずや。我等の生涯亦斯の如く、常に私心を去り、他のために己れを棄つるの覺悟なかる可からず。故に曰く我は世の光なり。汝等もまた世の光なりと。

曾てラファエルの名畫耶蘇變貌の圖の模寫を見る、一幅の畫中一方に

は至上の光榮に充ち輝ける山上の光景あり、他方には癩瘡にて惱み苦める小兒と之を携へ來りて其の癒されんとを弟子に求めたるも能はず、失望の極憂苦の情面に顯はれたる父と多數の人民群集してその混雜甚しき光景を示せり。一幅の中此兩面を寫すは程奇異の感なきに非ざと雖も、是れ最も善く基督の精神を描出せるものに非ずや。山上に於ては耶蘇即ち別乾坤の人なり。聖高純清なる世界に於て其の光榮は實に無上の點に達したるなり。然れども耶蘇は此を去るを難しとせず、苦痛と惱みに充ち信仰薄き者偽善なる者の群り臻れる山下の世界に降りて病を癒し民を救へたり。山に上りては其貌變じ神と交はり聖徒と語る。是れ即ち個人的事なりと雖、此の心を鍛練し養成するに非ざんば、決して山下に於る愛の行動をなすと能はざる可し。山上の變貌、山下の慈悲心は基督教徒の志なり。唯だ箱入娘の如く會堂のうちに潛み居るものゝ如きは、未だ基督の精神と一致せしものと云ふべからざるなり。

然れども今日基督教徒の通患は、山上に登りて神と契合するとなきにあり。英國ヴァクトリア女王の長位祝賀に付て、或人々は熱鬧繁忙なる都會の中に空地を作り、樹を栽し、池を掘り、之をヴァクトリア公園と名づけ、市民をして匆忙の間を遁れ、少しく休息を得せしめんと企てつゝありと聞く。眞に美舉と謂ふ可し。禮拜は基督教徒の公園なり。及び得る限りの時間を此に費さずんばあるべからず。願はくば日曜の聖日を會堂の一時間に止めず能く之を聖別するを得しめよ。之を斷行するの勇なきがため基督教徒の靈性日々疲勞し萎微し行くと事實に非ずや。在京都のゴルドン氏過般一書を寄せて、今日教勢の不振は聖日を恪守するの慣習疎そかになりしに由るもの多きとを論述せり。余輩は其の所説に賛成の意を表するものなり。基督教徒は愛の心を以て社會主義を奉ずるとし、もに獨り聖所に入て神と我との關係を密着せしめ、基督耶

蘇の心と一致するを力めずんばある可からず。此に至り初めて世の光
たるを得ん。

枯木の花

数日の後イエスマタカベナウムは来りしに、彼の家に居ると聞えければ、
直ちに多くの人々集ひ来り、門に立つべき場所さへもなき程なりき。イエ
ス彼等に教を宣ふ。此に癡癡を病める者を四人に昇せ、イエスに来れるも
のありしが、群衆により近づき難かりければ、彼の居る所の屋蓋を取り除
き、癡癡の人を床のまゝ、繩り下せり。イエス其の信仰を見て、癡癡の人に言
ひけるは、子よ爾の罪赦されたり。……耶蘇傍らの學者たちが之を咄や
き論するを知りて、夫れ人の子地にて罪を赦すの權威あるとを爾曹に知
らせんと言ひて、癡癡の人に、我爾に告ぐ、起て床を取り人々の前に出づ。馬
可二の一―十二

癡癡と云ふ病は、身體の利かぬ症にて、如何にも難澁を極むるとなり。此
の活潑なる世界に、手足をだも動かさず、起き臥し、人に扶けらるゝ
ほどの不仕合せを哀しむ情如何ばかりぞや。人と生れて世間普通の業
に就き難き病に罹れるを怨みて、自殺を企だてたるもの、余が朋友の内
にありき。此の癡癡病みの身の上には、同情の念を催ふさゝるを得ざる
次第なり。

然かし世の中は、必ずしも情なきとのみに非ず。互ひに憐れみて、相扶く
るの美事もあるを記憶すべし。此の癡癡病みは自ら助くるの力を失な
へるものなれど、其の友人に四個の信厚きものありて、其の不幸を憐れ
み、之を四人にて昇き、耶蘇の許に來れり。一人の病客を四人の朋友昇き
來れるは、實に美はしきとに非ずや。世の中は斯くありてこそ、人間の住
む所と見るべきなれ。路加傳を見るに、耶蘇彼等の信仰を見てとあり。癡
癡の患者が肉體の健康なるを得しのみか、特に罪を赦さるゝまでに至

りしは、唯だ己れの志のみには由らざりしなり。其の信する友垣の力に由る所多かりしと知るべし。我等は己が志と祈りとに由り、赤誠の通ずる所遂に他人の靈性をも救ふとを得べし。信仰の個人主義に偏するほど大なる誤りは有るべからず。

此の朋友等は病める者の不幸を深く憐れみたり。唯だ一片同情の涙を流せるのみにて、實際之を救ふの手段もなく、空しく憐れみの感覺のみにて過ぎなんは、眞に殘念なるとなり。世には涙を流すとを知りて、手を出だすとを知らぬものあり。彼等は目に哀憐を流し去りて、手には少しも其の覺えなきものに似たり。宛かも人の墮落を便宜に衣食する藝妓が演劇場に入情の所作を見て、涙潸然たるが如し。唯だ感ずるのみにて、道德の人たるを得ば、此の輩は聖人君子にも凌駕すべきなり。我等は感情の念胸中にありとて、必ず之を道德心の厚き證據となすべからず。之がために力を用ゆるに至らざる同情の涙あまり屢催ふせば、終に薄情

殘忍の心を剛致するやも計られず。是れ德義上靈性上の一大危險に非ずや。此の患者の友人は、同情の念より實際に之を救ふとを務め、其の心盡し至らざる所なかりき。志だにあらば、其の手段は自づから生ずるかや。彼等が熱心なる盡力は、其の前に横たはれる障礙を取り除き、愈よ出で、愈よ奇なる方法を案出し、大膽不敵なる所行をなすに至れり。人事みな此の寸法にて運ばざるものなからん。

彼の四人は患者を縋り下し、先に屋蓋を毀ちて作りたる件の穴より容子如何にと窺ひたるならん。彼等は慈悲深き耶穌必定其の病を立どころに癒すと知るべしと想像せしならん。然れども耶穌彼等の信仰を見て、爾の罪は赦されたりと言へり。此の聲を聞きて、屋上の四人は呆然失望せしならん。彼等は信仰ありと雖も、専ら物質的の恵みを求めつゝ、來りしなり、肉體の癒えなんを望みしに、唯だ罪を赦さるゝてふ目にも見えぬ。宛かも雲烟の如き賜ものを得ただけにては、拍子抜けしたる

心地やしつらん。屢ば之と同様な愚痴に陥りし我等は深く其の失
 錯を憫れまざるを得ざるなり。友等の心には患者の苦痛、首に肉體の自
 由を得ざるにありと見えしならん。然れども實は然らず。彼が病は尙ほ
 奥深き所に痛みを覺えしめたり。彼が胸中には、傍人の心付かざる刺
 りしなり。抑も彼が病は如何なる所より起りしぞ。これを醫士に問へ。癡
 癡は多く不品行より生ず。彼れが身動きの自由ならざるは、曾てあまり
 自由に之を用ひ、あまり酒色の樂しみに活潑なりし結果に非ざるなき
 を得んや。彼は過去の失敗、前日の非あり、其の痕跡を肉體に留め
 たるを覺えて、痛恨、鵠を断ち、道德上の片身甚だ狭く、良心の咎責針をも
 て刺さるゝ如くに感じたるものならん。醫藥の力に及ふべき病は尙ほ
 忍ぶべし。良心の苦痛、何を以て之を救ふとを得んや。朋友の信、親戚の扶
 助の厚きを見聞きするに付け、物として其の心を刺さざるなく、萬事之
 を惱ますの媒をなすに似たり。彼は良心の全く鈍りしものに非ず。肉體

は甚だ不健全なりしかど、心には尙ほ大いに見どころありと言はざる
 べからず。我等か遭遇するところの不幸、艱難は、肉眼の見る所、醫士の診
 察するよりも深きものあるを忘るべからず。或ひはヨブの如く、悪なら
 ずして苦みを受くるものも無きに非ず。罪なくして配所の月を眺むる
 の氣、樂人も往々にして是れ有るを得べし。然れども貧病患損害の中に
 罪より來りしもの少からず。之を肉體の事、金銀出納の事、利害榮辱の事
 のみと見るは、淺薄極まる考なり。道義の心あるものは、己れが失敗、頓
 を良心に照して、其の由來する所を究め、己が罪惡を觀念すべきとなり。
 よし針を以て刺さるゝが如くつらくも、之を忍ばざるべからず。漫りに
 他の事に紛らせて、之を忘れんと計るは、所謂罪の上塗をなすもの、其の
 墮落一層甚だしと言はざるべからず。
 耶蘇は靈魂の醫士なり。彼は其の友だちが見たるよりも深く病を診察
 したるなり。患者は今や手足の感覺を失なひ、半死半生の人なるにも拘

はらず、其の心に道徳上の苦痛烈しきを看破したり。此の際高潔にして、正義の光り人の肺腑にまで徹すべき耶蘇は、己が不徳を悔み、慚愧の刃に痛手を負ひたる患者を見て、同情溢るゝ如く、慈眼滴たるが如く、骨髄に徹する愛の聲を以て、子よと呼べり。此の明かなる義なる眼に見られ、斯の如き慈愛の言を掛けられて、爾の罪赦されたりと告げられしとき、癡癡の患者は、枯骨に齊せし如く、盲龜の浮木に逢ひし如き心地したるならん。彼が如き有様に陥ありしものは、耶蘇の外に之を救ふべき力あるべからず。有るところの罪を無きが如くに粧ほひ、良心を麻痺せしめ、既往を夢に付し去らしめて、僅かに頼み難き平和を與へんとするもの天下比々皆な然り。獨り耶蘇は罪を見ると明かに之を感ぜしむると痛切にして、尙ほ且つ之をしも救さるゝてふ確信を覺えしめ、幾多の悪しきとあるにも拘はらず、天父の愛を辱じけなふする見たるを感ぜしむ。是に於て志を勵まし、精神を振つて道に歸し、善に進むとを得るなり。大

いなる哉。福音の道や、律法に遭ひて死にたるパウロも、基督の福音に邂逅して、生きたりと絶叫せり。放蕩淫逸の少年アウガスチン、罪を悔ひて身を措く所を知らざりしも、耶蘇を見て罪を赦さるゝてふ平和を感じたり。ルイテルの如き、ウエスリーの如き、前聖古賢雲の如く、皆な愛慈みの玉座を繞りて、神の羔を稱讚す。癡癡病みは罪を赦されし後、其の肉體をも救はれて、手足自由なるを得、人間に出で、有益なる事業をなすの機会を與へられたり。基督を信ずるによりて、靈性活き復り、道念明かになりて、義人の生涯に移れるもの、古今幾何ぞや。赦され癒されし此の癡癡患者が當時の心事思ひやらるゝなり。

あまつましみづ　ながれきて
あまねく世をぞ　うるほせる
ながくかわける　わがたまも
くみていのちは　かへりけり

見よ神は大なり我等之を知らず

是れ約百が慰撫者の一人なるエリスに聽くところなり。天地の悠久洪大なるを思も。歴史の茫渺として際涯なきを考へ、上帝の威力盛徳を觀察すれば、誰か其の大なるに驚かざるものあらんや。誰か之を知らんと欲する己が智慧の小なるを感ぜざるものあらんや。神の存在や我之れを知る。其の大なるや我また之を覺らざるに非ず。其の愛や聊か之を味はざるに非ず。然れども神の智と愛との深さ、高さ、廣さは誰か能く之を探り盡すを得んや。然るに余輩動もすれば斯の如き神の盛徳威嚴を思ふとを避け、唯だ之を己れの利益に引き着け、不健全なる感情に支配せられて天父に狎れ、其の保護に資縁して、安心立命を僥倖せんと欲する

の弊あるを覺ゆ。神は宛がら宋襄一流の仁者なるか。神は我等の備ひたる看護婦の如きものなるか。曾て或人在天の父といふ語に不満を抱きて在天の母よと呼びしとあり。是れ現今多くの人を惑はす所の信仰上一種の傾向に非ずや。彼等は神は愛なりとの語に抱泥して、凡そ信仰は神を畏れ肅むに由て全うせらるゝてふ教訓を忘却し、神の威嚴と盛徳とに對して殆んど無感覺なるものゝ如く、俯して人の痛苦艱難を感じて罪惡と其の救ひとに心を勞すれども仰いで神の榮光に驚嘆し、我を忘れて聖なるかなを頌讚すると甚だ稀なり。彼等は其の祈禱、讚美、靜思、冥想の間に、罪と救ひとを記憶し、甚しきは疾病と其の救治とを念頭に懸ると雖も、神の榮光に至りては一切之を忘却するに似たり。彼等は神の聖義、吾人の思ひにも過ぎて大なるものあり、其の罪惡に反抗して之を惡み憤ふるや、吾人の意表に超ゆるものありて、彼の舊約の詩人が儼然たる神の公義を仰ぎ、誰か汝の怒りの力を知らんや、誰か汝を畏るゝ

畏れに比べて汝の憤ふりを知らんやと絶叫せし如き經驗に乏し。此故に罪惡に關する基督教の要旨を忽せにし、赦罪贖罪等を輕々看過して十字架の眞意を誤解すると甚だし。余輩は之と異りて大いに警醒を加へ、神と人との問題を正當に解釋せんとを務め、上帝の聖義實に限りなく、其の罪惡に反抗し之を惡み憤ふるの力無限なるを考へ、悔みざる惡の結果終に如何なる程度に達すべきやを思ひて神の前に跪坐正念するを要す。一種の基督教徒は舊約詩人の語を借用して、エホバは心の碎けたるものを癒し、其の瘻を包み玉ふと歡呼し、婦女子の如き感情に酔ひて、信仰の秘奧に達したりと速了するが如し。彼等は同詩人が此語に次々に左の句を以てしたるを忘却せり。曰くエホバは諸の星の數を算へて凡て之に名を與へ玉ふ、我等の主は大いなり、其の力も亦大いなり。其の智慧はきわまり無し。エホバは柔和なるものを維持し、惡きものを地に引き貶し玉ふと。神は我等が心の碎けたるを癒すの慈愛父母管

ならざるものあるのみならず、其の智慧と能力とは天地宇宙を貫通して漏す所なく、其の惡に對するや必らず不義なるものを地に引き貶す。此の如く神の愛に喜び、其の大なるを畏敬するの誠、兩つながら並び存してこそ之を眞の敬虔とは稱するを得るなれ。余輩は恐る、今日の基督教徒多くは此點に於て非難を免れざらんとを。神の聖義絶対無限にして、其の惡に對する反抗力無盡藏なるのみならず、基督に依りて顯彰せられたる神の慈愛も亦た絶対無限にして、遠く吾人の意表に出づ。神自ら己れを虚うして人間に降下し、僕となりて十字架の痛苦を経験せり。是れ愛の最も大なるものにして我等の得て知るべからざるものなり。非ずや、宜なる哉。パウロが大いなる哉。敬虔の秘義と絶叫したるや。余輩冀くは成るべく多くの點に於て神の大なるを感じ、其前に拜伏讚嘆して、信仰を完全ならしめんと欲す。

祈りにつきて

必らず聽かるべき祈り

路加傳十一章十三節に曰く

爾らのうち父たるもの誰か其の子麵包を求めんに石を予へんや魚を求めんに之に代て蛇を予へんや爾ら悪きものながら善き賜を其の兒らに予ふるを知らば天に在す爾らの父をや何ぞ求むるものに聖靈を予へざらんや

神の國と其の義きとは吾らの第一に求むべき所惡に勝ち正しきに進み神と一致するを得んがために天來の感化を求むるに於て何の遲疑する所かあらん正心誠意願ふ所は必ず成就すべきを疑はず

其の場合に由りて聽かるゝ祈り

馬太傳二十六章三十九節に曰く少し進み往てひれ伏し祈り言ひけるは我父よ若しかなは此の杯を我より離ち給へ然れど我心のまゝを成さんとするに非ず聖旨に任せ給へど人生の利害窮達盡く我等の短視淺見を以て判断すべきとに非ず身を謙りて萬事を神に委ね己が心に熱望する所を憚るとなく聽え上ぐれども其の結果は神の聖慮に任す是れ基督教者平和の途なり

何故に祈りを口に唱ふるや

神は我等が口に言はでも無くて叶はぬとは既に之を知る隠れたる思も上帝の前には之を蔽ふと能はず故に祈りを口に唱ふるは敢て神に聽かしめんと欲するには非ず心動けば言従つて之に次ぐ是れ人性の自然なり口を抑へ耳を塞ぎ唯だ瞑目黙想の間に祈禱を歴しすくめんとするは人類の情理に反すると頗ぶる甚だしと謂はざるべからず思

ひて歌ひ、感じて泣き、疾痛慘怛、哀を天に求む、皆な同一の理に基くもの
 とす。斯るとを餘り窮屈に機械的に考ふるが間違ひなり。
 且つ心に潜める祈りを言語に發するときには、感情の趨向を明かにし、所
 懐を確かにするの益少からず。之を心の中に秘め置くのみにては何と
 なく諸事漠然として不確かに感ぜらるゝの弊あり。容を正し、肅然とし
 て神聖なる聲に祈りを顯すときは、言と意と相打ちて精神の火漸く燃
 え、祈りの精神一層旺んなるを覺ゆべし。我等の深く感嘆する所、求むる
 所、及び祝謝する所を言語に顯はして神に告ぐ。是れ最も宜しきを得た
 る處置に非ずや。
 ルウテル曰く胸中に潜める感懐及び神に向ひて上る心の活動あらば
 既に祈りたるに相違なし。然れども口に唱ふるの祈りも亦た廢すべき
 ものに非ず。精神上の祈りを熱切にし、純潔にせんには之を口に唱ふる
 と實に肝要なりと。

祈りは社交的なり

曰く天に在ます我等の父よと。既に我等の父と稱ふるからには他人と
 相携へて神の前に出づるとなるを知る。宗教は孤立單獨の事に非ず。利
 己心の内に籠城せるものが神に感じ、人に感じて城壁を取り毀ち兄弟
 相親しみ、彼我心を合せて天父に近寄る。是れ祈りの特質に非ずや。獨り
 自らを潔くし己を高しとして孤立の信仰を保たんとするは氷室に坐
 して暖を取らんとするに同じく、其の所爲矛盾の甚だしきものなり。
 獨り密室に坐して祈りすれば、人情の弱きより動もすれば唯だ己れの
 利害休戚のみを思ひ運らし、専ら主我的の求めを神の前に陳列して少
 しも其の非なるに心付かざるとあるべし。然れども二三人の同志膝を
 交へて肝胆を吐露し、靈性上の經驗を交換するときには、諸事公平になり、
 純潔になり、志高く、愛博くして、神の爲め、また人類の爲めにするの希望
 切なるに至る。斯くて二三人の意志合し、高潔無私の目的を明かにして

天父に哀願するときには、其の勢力の大いなる固より其の當然とす。二三
人集る所には我も共に集らんと仰せられし聖語の意味蓋し此に存す
るにやあらん。

五十人と言はず、又た百人と言はず、僅かに二三人と言ふ。あゝ何れの教
會が二三の同志なからんや。教會の現状、傳道の興廢、信仰の冷熱等に付
きて痛憤憂慮する二三人の兄弟姉妹相合して神に祈るほど貴きことな
し。此の貴き祈りの如く、心靈世界に有力なるものは他に之を見出だす
と能はざるべし。傳道も教會も斯る祈りに由りて維持せらるゝが存外
に多し。

執り成しの祈り

身を以て人に代るは基督教の精神なり。主耶蘇の生涯を貫きて顯著な
るは人の爲めに自らを犠牲にするとなり。唯だ十字架に淋漓たる血を
指して此の精神の存する證據とするは其見解甚だ淺薄なるを免れず。

基督は平生人の罪と愛ひとを己れの一身に負擔し、其の不思議なる同
情に由りて我等の苦痛を自ら經驗し、血涙を流して天父に哀訴し我等
のため言ひ難き嘆きを以て祈禱せり。之に由りてペテロは救はれた
り。之に由りて我等も亦た救はるべし。基督を信するものは皆な他人のた
めに執り成しの祈禱を捧ぐるてふ特權を與へらる。病ひに罹れるもの、
誘惑の内にあるもの、困窮に泣くもの、疑惑の暗の中に迷ふもの、生別に泣
くもの、死別に腸を断つもの、ために温かなる同情を抱き、熱切なる祈
禱を神に捧げ、獨り祈るのみならず、同人心を合せて諸共に神の助けを
求む。基督教者の最も善く其の主に似たりと感せらるゝは此の間に在
りて存す。自ら世の罪惡不信を嘆き、他に代りて執り成しの祈りを天父
に捧ぐ。精神上の高貴之に勝るもの無からん。我等の信仰振ひ起らず、教
會を擧げて稍沈靜の姿あるは蓋し執り成しの祈り盛んならざるを以
て其の一原因となさる可からず。我か信仰の發達は、朋友執り成しの

祈りを捧ぐるに起因するもの驚くほどに多く、教會の運命一二會員の熱心なる祈禱に由りて決せらるゝと少からざるべし。近頃世を去りし北米合衆國の女文豪ハリエツト、ピイチヨル、スタウの傳を讀むに、之と思ひ合せて大いに益ありと覺ゆる一節あり。女史の愛兒遠く外國に在りて懷疑の風に染み、不信の淵に沈まんとせしとあり。女史之を聞きて憂慮措く能はず、船ごとくに書を送り、便ごとに音信を通じ、或は論じ、或は諭し、或は諫めて、百方其の力を盡したり。慈母子のために苦心するの誠、腹を斷つに堪へたりと謂ふべし。然れども愛兒の心は頑として動かざるなり。スタウ夫人此に於て獨り人力の能くする所に非るを感じ、之を天父に訴ふるの外途なきを悟り、丹誠を挺んで、神の助けを求めしが、忽ち郵便は好音を傳へ來りぬ。曰くクリスマスの時余は圖らずも心に光明を得たり。余は前日と異なりし眼を以て事物を見始めたりと。此に於て女史の感謝知る可きなり。然れども豈に是れハリエツト、ピイチヨル、

スタウ氏のみならん。基督教者は斯の如く相共に執り成しの祈りを成して、宏大なる恩寵を受く可し。人のため、家のため、教會のため、國家のため、世界のために斯の如く祈りて大いに勢を振ふるものは基督教者に非ずや。エゼキエル二十二章三十節に曰く、我れ一個の人の爲めに石垣を築き我が前にあたれる其の破壊所に立ち、我をして之を滅さしめざるべきものを是等の内に尋ねど。是れ神の聲なり。城危ふく垣壞るゝに當り、神は身を以て其所に立ち、以て之を救はんとするものを喚ぶ。所謂國亂れて忠臣出づるものは是れなり。教會も國家も人の眠れる間に目醒めて憂憤慷慨し、切りに執り成しの祈禱を捧ぐるものありてこそ、其の存在を維持するを得るなれ。夙夜石垣の破壊所に立ちて祈るものは誰ぞや。

深き所に漕ぎ出でよ

衆人神の言を聴んきて押し合ひしとき、耶蘇ゲネサレの湖の邊に立ちて、磯に二隻の船あるを見る。漁夫は舟を離れて、網を洗ひ居れり。其の一艘はシモンシモンの舟なりしが、耶蘇教へ宛りしとき、之に謂ひけるは、決へ出で、網を下せシモン。

シモンは終夜、漁に力を盡せしかば、所得なかりし故、今日は是までなり。と断念めたるなり。まいて日高く上りし今は、時刻も宜しからず、網を下さんば、思ひも寄らぬことなれど、主の仰せかしこく、御旨に従ひて之を試みんとて、網を下せしに、魚を圍めること意外に多く、網も裂けんす勢ひなり云々(路加傳二章)

思ふに吾等が宗教を研究するも大いに之に類するものあり。波打ち際は騒しきのみにて、漁獲も無かるべし。思ひ切りて澳の方に乗り出で、一ト網試みなば、或ひは世に珍らしき魚をも獲ることならん。宗教のこと、また然り紛々たる議論多くは、是れ宗教の波打ち際、磯荒く、潮水濁りて、

響き烈しきのみ。たゞ心を此の邊にのみ拘禁し、未節の問題に思慮を専らにして、彼の千尋の底見を難き程の大事を忘るゝときは、たゞひ終夜力を盡して書は萬巻を讀破し、辨難討論は筆を秃にし、舌を爛すに至るども、何の發明する所無くて止みなん。罪惡は何れより來りしぞ。神は如何なる方法を以て世を統治するや。惡魔に關するの疑問は如何に之を解釋すべきや。曰く聖書のイレスピレシヨ、曰く福音書の年代、曰く耶蘇の奇蹟異能、曰く教會の利弊、曰く傳道者の性質、曰く基督信徒の陋習、曰く迷信厭ふべし、曰く基督教と仕官商買の關係など、皆な此れ餘力あるを待ちて研究すべき大問題なり。理を探り智を磨く點よりすれば、大切なる事件にて、其の實際の影響蓋し少なからざるべしといへども、之を要するに宗教海の波打ち際たるに過ぎず。此所に繫れつゝ、道の妙所に詣り、靈性の眞理を執へ、宗教の堂奥に達せんと欲するも無益なり。區々たる門前の小理窟にあたら力を空費せんよりは、靈性の問題を目

標に生命の澳に心を馳せ萬里一碧無限の境に漁りするを務めざるべからず。

區々たる小節目を討論するに忙はしく事の大躰を達観することを中心懸げざるがために群疑百出して之を解くに由なきを苦しむなり。吾らは己れの小理窟に立て籠り己れの思ひ込みたる一點に隘を凝して廣く考へ大躰の點より局部を観察するを怠るの弊あり。悪鬼ガダラの豚に入りしを疑ふものは、たゞ之をのみ考へて基督傳の全體を察せざるなり。基督教の超自然的要素に不審を懐くものは此の事一途に思惑ふて、天地の根抵超自然にして己れの求むる宗教の基礎本來此所に存するを思はざるなり。斯の若く廣き點より觀れば容易に合點せらるべきことを窮屈に考がうるため迷惑に苦しむもの多し。

クレオバと他の一人エマオの邑に赴く途上耶蘇の死と其の復活せしとの取沙汰に付き互ひに語り論じて疑惑解難く共に欣然として嘆

息するのみ。路加廿四章。此の二人は十字架と復活に關する議論の波打際に漂ひて思ひ惑へるなり。耶蘇自ら近付き之に告げて曰く預言者の言ひし事を信する心の遅き愚かなる人々かな。試みに思へ基督は此等難みを受けて其の榮光に入るべきに非ずやと斯くてモーセより凡ての預言者を始め聖書の記事に就きて己れの事を説き其の陰き心を開きて上帝顯現の歴史と救世の大道とを熟慮せしめ觀察の點を更めて彼の十字架と復活とを思はしめたり。二人の心は燃るが如くに感じ、終に主のまことに復生りしことを自ら確信するのみならず他人に向ひても之を保證するに至れり。

且つ凡そ宗教を究めんと欲する人は成るべく其の疑題のなかにも、靈性の事に關する深き點に着眼し大に得て小を併せ要を撮りて閑問題の後にする用心有るを要す。罪如何に脱すべきや、人生の志望如何にして成就せらるゝや、死は果して萬事を終るべきか、神なしとすれば天

地の意義果して如何ん。此等を問ふは、即ち宗教の沖に靈魂を漕き出だせるなり。所獲必らずや多からん。
 宗教の眞理に達せんと思はば、吾が靈性の底に潜り入り、生命の疑題に心を用ゐる高貴なる志しに目を着け、熟地に其の最大問題に向つて進まざるべからず。區々枝葉の議論に精力を徒費すべからず。

そこひなきふちやはさわく山川の

あさき瀬にこそあだなみは立て

耶蘇自らミサイヤなりとして世に立ち、神の國を設くべしと主張せらるゝにも拘らず、之を圍繞せる情況及び其の遭逢、越歴人の意表に出で、疑惑の種となりしもの多し。此のうちに其の弟子多く返へり去りて耶蘇とともに行かざりき。此は彼らが耶蘇に付きて波打ち際の問題にのみ頓着したればなり。之に因りて耶蘇十二の弟子に言ひけるは、汝らもまた去らんと意ふや。シモンペテロ答へけるは、主よ我ら誰にか行ん。永生

の言を有するものは汝あるのみと。彼は當時尙ほ神學上の知識殆んど之無かりし人なり。種々の大切なる點に於て理會せざること多く、時としては必定疑惑に苦しみしことならん。然れども宗教の波打際に心の舟を繋ぎ、其沖の方に目を着け、限りなき生命てふ大問題の中心として耶蘇に接したるなり。之に因りて彼は世の中如何に變はり天下を擧りて主に背くとも自からは基督に離れじと決心せり。吾らも宗教の沖に漕ぎ出でざるべからず。

基督教徒の師道

ヨハ子辭みて曰けるは、我は爾よりバプテスマを受くべき者なるに爾反つて、我に來るか。(馬太三の十四)

上
 新日本青年のためにも最も必要なるもの、一つは師道なるべし。長上を尊び、道の存する所を師とし、喜びて之に事ふるの精神厚からずんば、國家健全なる進歩をなすべからず。個人も徳を建て、信を増すとを得ざるなり。師道大いに講せざるべからず。ペンヤヤミン、キツド、科學的に社會進化の理を研究し、其の原動力は理性のみに非ずして、宗教の力に由るもの最も多きを説きぬ。英國の保守黨政治家に其人ありと知られたるバルフォール氏は、其の近著に於て、信念の基礎を説明し、凡そ人類の進歩は理性よりも寧ろ權威に由れるもの最も多しとの事實を明かにせり。世人往々此の眞理を覺らず、傲然放恣に自家の理性を弄し、敢て天地神明の大道を喋々せんと擬す。眞に思はざるの甚しきものにあらずや。此の點より見るも我等は精神の獨立を鼓舞し、事理を飽くまでも研究するの氣象を發揮すると同時に、正當なる權威を明かにし、師道を興す

の必要を認めずんば有ざるなり。師道は大問題なり。一朝一夕の談之をして餘蘊なからしむること思ひも寄らず。余は今夕施洗者ヨハネと主耶蘇基督との關係を説きて、此の道の一端を窺はんと欲するのみ。獨一の眞神を奉じ、萬國に祝福を與ふるを以て其の天職と確信せるニ、ダヤの國民も、今や羅馬の武威に屈し、到る所國破れて山河ありの感慨を催ふさいるものなきに至れり。尊大にして他を夷狄視せる神州衰るへて、愛國の志士悲憤の涙を呑み、國勢を挽回せんと欲して、經營慘憺、足を翹て、時の至るを待てり。然れども回天の功は縱横の策士によりて全ふせらるべからず。眞正の改革は靈性の根底より發し、精神の復活より始まるべきものなり。政令、法律に拘泥し、専ら制度、文物に待みて、一國を振起せしめんと欲するは、我等其の智なるを知らざるなり。ニダヤの國勢はまさきに精神の改革を促がし、靈性の復活を待つと、早天の雨に於

けるよりも甚だ切なるの状況にてありき。
 時にユダヤの野に卓犖奇偉の人傑現はれたり。精神火の如く、氣力一世を蓋ひて赤誠より發する其の言論宛かも雷霆の如し即ち叫んで曰く、天國は近づけり悔ひ改めよと。祭司も富豪も兵士も税吏も草の風に靡く如く、彼が言論の至誠に打たれて皆な非常なる感動を受けたり。其の聲ハレステチナの山河を震撼して、民はエルサレム及びユダヤを擧りヨルダンの四方より雲の如く群集し皆なヨハネに就きて己が罪を悔ひ、之を告白してヨルダンの水にバプテスマを受たり。斯の如くヨハネは大いなる道徳的復興の中心となりたり。
 彼が教を受けんとて集まり來れるものの中に、ナザレより耶蘇も來會せり。主は他の人民の如く、ヨハネの洗禮を受けんとて來りしなり。耶蘇とヨハネ！ 相對してヨルダンの河畔に立つ偉大なる現象之に勝るものなかるべし。天下の長者と崇められ、一國の師と尊まれしヨハネは、

更に偉大なるもの、前に謙だり之に洗禮を授くるとを辭みて、我は爾よりバプテスマを受くべき者なるに爾反つて我に來るかと言へり。其の狀宛かも師弟地位を顛倒したるに異ならず、傍の人をして奇異の思ひをなさしめしとならん。耶蘇にバプテスマを求められたるヨハネは、反つて之に師事せんと言ひ出でたり。王公にも屈せず、水火にも怖れず、天地に獨立濶歩せる偉男兒は、今や謹しみて他の教を乞ふに至りしなり。
 彼は學校出身の人に非ず、孤身曠野に退きて死海の邊り草枯れ人絶えて沙漠々たる所に、唯だ神と親しみ舊約の古聖賢を友として、道を修めたる人なり。自から教育するの益少からずと雖も、其の弊動もすれば、傲慢不遜に流るゝに至る。斯る人は精神界に於ける墮壞の老翁となるの恐あり。天を師とし、自然を友として、己れの心を修養するより、傍若無人の氣象を成さんとするは、深く怪しとするに足らざるべし。故にヨハネ

が自から屈して他に師事せんとするに至りしは、決して容易きとに非ざるなり。

然のみならず彼がハリサイの徒を属倒し、權門豪族を物の數ともせず或はユダヤの王を責め、或は人を蟻の裔に比して駁撃せしを想へ。天性獨立を貴ぶの氣象、其の眉間に躍如たるを見ん。此の獨立獨歩の人、躬を卑ふして人に従はんを欲するは、風に靡く草の如きに非ず。宛がら松柏の風に偃すが如しと言はざるべからず。耶蘇曰く汝等何を見んとて野に出でしや、風に動かさるる葦なるか、柔かなる衣服を着たる紳士なるか。然らず女より生れしもの、内最も大なるものはヨハネなり。此の人にして師道を重んずると斯の如し。我等後進の徒、之を顧みて慚死せざるを得んや。當時ヨハネは頗ぶる得意の人にてありき。ユダヤの人心は響の音に應ずる如く、野に叫べる人に傾ふきぬ。彼は道徳界に於ける無冠の王なり。失意の人節を折りて、人の教を待つとは容易なり。然れど

も意氣揚々志漸く成就して、勢天下に時めくもの、然するは極めて難事に屬す。况やヨハネは已でに青年の人に非ず。三十にして立つと謂ふ年齢を超え、新陳代謝の間に立ち、全く新約的となり得ざる精神を以て新時代の創立者たる耶蘇の前に在り、駱駝の裘を着、腰に革の帯を束ね、蝗と野蜜とを食ふ。其の習慣、飲み食ひしつゝ、人間に往來せる人の子と相容れざると氷炭のみに非ざるなり。斯の如く觀察し來れば、施洗者ヨハネの師道に於ける精神、舉動、驚嘆に堪ざる者あり。彼が耶蘇に師事せんと言出たるは、深き仔細なかるべからず。如何にして彼は斯の如きとをなすに至しや。ヨハネが耶蘇に就きて感じたる所のものは、彼が世に遺せる片言隻語を玩味して、其の一斑を見んとを得べし。彼は耶蘇を指さして、世の罪を負ふべき神の羔なりと絶叫せり。耶蘇の品性圓滿にして、罪惡の汚點なく、人倫に超絶して、世の罪を負ふべきを着破したるると以て見るべきなり。之を約言すれば、彼は耶蘇の人物に敬服したるなり。

又曰く、我神の聖靈の如く降りて、其の上止まるを見たりと是れヨハネが神の威靈然として基督に寓りたるを認め、天を畏れ神を敬するの心を以て此の聖なる偉人物に對せんと心懸けしものなるを示せると非ずや。彼は己れの事業未曾有の成功に伴なはれ、人心を感化せしが感化の達する所靴を隔て、痒搔くが如き遺憾なきを得ず。即ち慨然として曰く、我は水を以てバプテスマを授くと、彼は己れが力の足らざるを感じ、頻りに火のバプテスマを施し得べきものゝ出でんとを渴望せり。唯だ天下のために之を渴望せしのみならず、また自からのために斯の如き救者に接せんとを求めたるものなり。ヨハネが野に呼べる人の聲と言ひしは、イザヤの四十章より出でたる語なり。彼は平生に此の豫言者の書を味ひ、此の章に述べられし靈なる牧羊者の必要を感じて、切に其の出でんとを望みしものならん。又彼が神の羔を見よと言

ひしは、同預言書の第五十三章に出でたり。神の僕來りて世の罪を一身に負はんとすると無限の感慨を以て此の章に記載せられたり。彼は常に之を愛讀し、其の意義に感じて、自からのために神の羔を慕ひしに非ずや。ポイド、カーベントル、ヨハネは深き人物なり。常に靈性の渴望に動かされし人なり。彼は自から野に呼べる人の聲に比せし如く、一身の利害榮辱に拘はらず、天命を奉じて其の聲を揚ぐるを以て満足せり。彼は公平無私の人なり。新郎の持てなさるゝを喜べる其の朋友を學ばんと心懸けたる高潔の精神は以上列擧せる種々の事情に促がされて、ナザレの耶蘇を己れの師と仰ぐに至りしなり。時を隔つる二千年の今日と雖も、ヨハネの如き心を以て、また彼が如く飢渴を慕ふの志を以て、耶蘇に接し、其の高潔神聖なる品性を仰ぐものは、實に基督こそ人類の師なるを悟り、罪も疑も誘惑も艱難も、一に之に由りて救はれんと欲するに至らん。望む所低く、期する所小にして、自尊傲慢、偏頗固執の徒耶蘇に

邂逅して、尙ほ師道の重んずべきを覺らざるは、最も残念なるとなり

下

ヨハネは是の如く虚氣平心を以て、耶蘇基督に師事せり。たゞ薄志弱行の人のみ、心靈界の君師を要するに非ず。然か思ひて、傲然世に睥睨し、自負高慢ひたすら己れの智術識見に頼む豈はヨハネの舉動を見て深く願みざる可らず。夫れ大人は赤子の志あるを尙ぶ。幼兒の如き精神あるものに非れば、天國の秘義に達し、其の眞味を解すること難し。心の貧しきものにして、初めて神の國に財を積むを得べきなり。得意の人ヨハネが己れを屈して、耶蘇を欽慕せること斯の如し。そのうち失意の境遇に陥り、疑惑の暗黒に包まれし時、彼は如何なる舉動を爲せしか。
ヨハネは正義の豫言者なり。聞くもの、地位名望に隨ひて、其の言を二三にするものに非ず。彼は税吏を責め、粗暴なる兵卒を難りて、假借する所なし。パリサイの徒は彼が眼には蝮の類にてありき、ヘロデ王其の兄

弟ピリポの妻を奪ひて、人倫を紊り、人君の徳を破りて、忌み憚かる所なし。玉座を汚せる罪惡は世の最も嚴しく非難すべき所なり。是の故にヨハネ古への豫言者の如く、忠實に國君を諫め、切に其の反省を促せり。其の口は苦し野に呼べる人の忠言は、端なく王の逆鱗に觸たり、天爵を有せるヨハネは鄙俗なる人爵のまへに、身軀の自由を失ひ、死海の沙塵吹き荒ぶマカエラスの囹圄に繋れたり。獄中の艱苦甚だしといへども、彼が懷抱せる大志を奪ふことを得ざりき。其の思想はつねに國家の休戚に注れたり。其の慷慨は神の選民なるイスラエルの現狀に付きてなり。其の希望はイザイヤの豫言に基けり。彼が獄中の疑問は來らんとするものはナザレの耶蘇なるや否やてふ一事にてありき。以て彼が獄中の思想那邊に専らなりしを知るべし。依然たる舊精神、其の胸に躍りしかど、其の半面は疑ひの雲に隠れたり。理想の影漸く暗く、思ひ設けし所或ひは覺束なく感ぜらるゝに至りて、人生の悲劇實に腸を斷つに堪へた

り。彼は心中に惑ひて曰く、來るべきものは、果してナザレの耶蘇其の人にてあるか。我等の希望を遂る近きに迫れりと勇み立ちしは誤りにて、前途は尙ほ迫かなるか。人類の欲望は左ながら影を追ふが如く永久に延引せらるべきかと、志士の泣くは此所なり。仁人の悲しむ所、他に非ず。人情の遺恨、此の上やあるべき。ヨハネは今や此の悲境に立ちぬ。其の心事哀れむに堪へたり。

然れども疑惑に難めるヨハネは、尙ほ耶蘇に向ひて其の解釋を求めたり。彼は耶蘇の精神に感じ、其の徳を慕ふこと深し。彼は耶蘇の意識の己れの意識よりも大なるを知れり。得意時代の師はまた失意時代の師たらざるべからず。故に此の疑惑を訴へんもの、耶蘇に非ずして、將た誰ぞや。此の問に接して耶蘇答へて曰く、往いてヨハネに告げよ。神は現に今世に作用きつゝあり。人類の必要世の苦痛は決して天の看過さる所なり。視よ神の愛は余が手に由りて世界に溢れつゝあり。マカエラスの

獄裏に在りても信仰の眼には、天の慈愛日の輝くに異ならざるべし。大いなる靈魂は其の歡喜を苦痛のなかに見出すことを得ん。天道愛無くして靜かなるに非ず。心短きは人類の弱點なり。上帝の道人の意表に出づるがために信念の躓きを來さるものは福ひなり。逆境の五里霧中に在りて、從容自適神の妙智に頼るものは福ひなり。吾が故を以て躓き仆れざるものは福ひなりと。

心靈界の君師は明にヨハネの人となりを知りぬ。彼はヨハネの非凡なるを認め、之に信任を置くこと深かりしが故に、斯る氣韻高き答をヨハネには贈りしならん。世には漫然人を慰むるものと慰むるともに其精神を高貴ならしむるの別あり。前者は獲易く、後者はまことに獲難し。耶蘇がヨハネを慰めし如きは、其の心を安んずると同時に其志氣を高潮に達せしめ、其信念を絶頂にまで昇しめたり。たゞ兒女の如く泣き、兒女の如くに撫で慰さめらるゝは志士の本意に非るなり。

信條に非ず。多數決に非ず。威力に非ず。たゞ眞箇の精神ひとり世界の君
 師たり。人性の健全は威力に導かれ、形式に支配せらるゝに由りて傷は
 れ、高貴なる精神を君師と仰ぐに由りて益堅固に且上達するを望むべ
 し。ヨハ子は清めらるゝため、救はるゝため導かるゝため、照さるゝた
 め、救へらるゝために耶蘇に師事せり。得意にして心青天に似たるとき
 も、失意にして疑ひの淵に沈まんとせしときも、彼は耶蘇基督に訴へし
 なり。而うして彼は人の與へ難き火のバプテスマを耶蘇より受けたり
 き。智者何所に在るか。哲學者何所に在るか。輿論何所に在るか。多數決何
 所に在るか。批評何所に在るか。我は人類の大豪ヨハ子とともて耶蘇に
 師事せんのみ。其の言行は載せて福音書に在り。其の感化啓導は活きて
 尙ほ吾らのうちに振へり。大いなるかな基督教徒の師道（右の一篇英國ラ
 著書を讀みて起因す）

明治廿九年のクリスマス所感

聖誕節と歳末

基督の誕生は、何の月に在りしか。古今學者の説區々にして定かならず、
 或は繁忙なる年末に之を祝せんより、寧ろ新年に入りて其の節會を
 催ふすに若かずと言ふものあり。聖誕の月日判然せざるとゆえ斯くな
 すも敢て差し支へありとは言はず。然れども之を年末に祝するは一層
 趣味深く、精神上にも利益多かるべしと思ふ所あり。歳窮まりて儻かに
 數日を餘すのみ。老大多少壯も皆な兵に年光の疾かなるに驚き、人生の
 夢の如くなるを嘆せざるもの無からん。此の時に當り家庭に於て、又教會
 に於て、老人も其の子女と打ち混じり相携へてベツレヘムの驚くべき嬰
 兒を訪問し、其の祝福に由りて前途望み多き少壯の意氣を増し、老ひた
 るは益す壯んに若きは愈よ勇みて新年に入るの準備をなすは、幸福の
 至りなりと謂はざるべからず。基督の福音は更生の道なり。紅顏の齡迄

かに過ぎて、白頭の翁となりしものにも再び生れ更りて神の國に進め
 どの勸告は傳へらる。彼のニコデモの如く、人既や老ひぬれば如何さま
 た斯くの如きとあらんと、老衰の止め難きに力を墮し老少不定と諦ら
 めを附け、年々歳々唯だ墓に近づくと嘆息するの外なく、特に歳晩の所
 感いと、濕り勝ちにて、人生を果敢なむ如きは悲惨の極、人間の恨事此
 の上やあるべき。四月櫻花爛熳の候に復活を祝せる基督の徒は、嚴冬霜
 深く、草枯れ葉凋みて、人生衰老の運命を啣つ頃、俄然基督降誕の祝節に
 會するは、枯木に花の咲きたる如き心地せらるゝに非ずや。我等乞ふ諸
 共に此の愉快なる節會を祝ひ、人も自らも少壯の意氣を鼓し、限りなき
 永生の希望を以て新年を迎へん。

豈にクリスマスマスの意義に驚かざるを得んや

恍然として生きた、夢心地のうち、月日を送迎するもの、忽ち釋迦の
 如く、西行の如く、彼の教盛の首級に泣きし熊谷の如く、人生てふ疑題の

電氣に撃たれて、恐ろしき死の正躰に接着するとき、精神の根底之が
 ために震動し、志氣の向ふ所之より一變すべし。是は歴史に於て、我らの
 屢見る所の事實に非ずや。或ひは靜坐瞑想心を玄妙なる理想界に馳せ、
 幻影の世界を踏破超越し、列めて真如の月を仰ぎ、萬化の源に溯りて、天
 地の眞躰を看破し、尙ほ進んで上帝の威徳に接觸するものは、之がため
 に既往の生命宛がら夢の如く、現在と將來とに對する其の心の姿勢正
 しく、別天地を歩むものゝ如く、然れどもクリスマスマスの意義を的切
 に觀察して、其の含蓄するところを聞き、其の事の真相を有りのまゝに
 覺知するとき、其の結果更に大いなるものあり、影響の及ぶところ實
 に無限なりと謂ふべし。古への人之を以て、東天に旭日の輝くに比せり。
 蓋し基督以前の世界を暗夜とし、其の以後の世界を青天白日と見做せ
 るものならん。クリスマスマスの意義を覺ると覺らざるに由りて、一個人
 の生命にも、劃然晝夜の如き差異は生ず。此のクリスマスとは何の謂ひ

ぞ、や、他なし、神人となりて世に生れたりと云ふ是れなり。クリスマスは
 蒼生を恵み、迷愚を啓發し、罪惡を救はんがために一の聖者世に出でた
 るを紀念するのみならず、又吾人のために身を殺して仁を成せる博愛
 任侠の偉人生れたるを祝するのみならず、彼の嬰兒としてベツレヘム
 の槽に生れ、吾らのために死せしものは、此れ即ち天地の造成主、全能
 の神なるを感銘するの祝節なり。天地は神の祝福を以て充満す。上帝の
 富は無盡藏なり。神の賜は此の無盡藏より出づる大海の一滴と見るべ
 きか、將た神は無盡藏にあらざる其の獨一無二の愛子を與へしか否な
 神は自らを與たへしか、身を殺して仁を成すてふ語は稱れに人間に通
 用すべし。此の心亦神に存するか否な、此の事實現に神に存するか、愛の
 極は最も高貴なるものを與ふるに非ずして、能く自からを與ふるに在
 り。神實に人のために自らを與へたりと信ずる、是れクリスマスの本意
 に非ずや。天地の根底は、此の如き熱切なる愛なり。犠牲獻身は上帝自ら

の本性なり。我らは各自此の愛を被ふり、此の熱情に包まれ、此の赤誠に
 導かれ、此の犠牲獻身的に精神に由りて救はる。此れクリスマスが我ら
 に傳ふる所の消息なり。此の消息を信すべきか、將た疑ふべきか。生命の
 晝夜此に於て判別すべく、基督教の意義之に由りて定るべし。

東方の博士

夫れ耶穌はヘロア王の時ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、其の時博
 士等東方の方よりエルサレムに來り言ひけるはユダヤ人の王とて生れ給
 へる者は何處に在すか、我等東方の方にて其の星を見れば彼を拜せんた
 めに來れり。ヘロア王之を聞きて痛む。又エルサレムの民も皆な然り。凡て
 の祭司の長と民の學者とを集めてヘロア問ひけるは、基督の生るべき所
 は何處なるや、答へけるはユダヤのベツレヘムなり……是に於てヘロ
 テがに博士等と呼び……之をベツレヘムに遣はさんとして言ひけ
 るは往きて稚子のを具さに尋ね來れ、我も亦往きて之を拜すべし。彼等
 王の命を聽きて往けり。前きに東の方にて見たりし星先だちて行く。博士
 等此の星を見ていたく喜びぬ。已に家に入りければ稚子マリアと共に居
 るを見、平伏して之を拜し、寶の函を開き、黄金、乳香、没薬など禮物を捧げた

リ。終にヘロデに歸る勿れと默示を蒙りしは、遂に歸りて其の國に歸れり。(馬太傳第二章)

我等は此の記事に付きて批評的に研究し、星の性質などを喋々せんぞ欲する者に非ず。此の聖誕を祝するに當り、靈性の利益を得るの一助に供するの目的を以て此の章を讀まんぞ欲す。

博士等は眞實に道を求むるの人なり

東方の學者多くは迷信に惑ひ、星を觀て吉凶を卜ふの弊あり。然れども基督降誕の頃、エダヤの國に來りし博士等は、眞實に道を求め、靈性上の渴望已み難く、遙かに天の一方を仰ぎ、更に聖人の出でなんとを待ちしものなり。彼等は未だ道を明かにすると能はざりしと雖も、其心直くして所謂未だ知らざるの神に向ひて誠實に進みつゝありき。彼等は多くの迷信に眩まされ、其の胸中に蓄ふる所の誤解も少からざりしならん。然れども一片至誠の念ありて存せしがため、終に導かれて基督の許

に來りしなり。蓋し東方に在りて彼の奇異なる星を見しもの何ぞ是れ等博士のみならんや。自餘の學者も皆な之を仰ぎ見て種々の臆測を下し、覇者の出づる前兆なりとして自ら風雲の會に乗せんと謀りしものもあらん。唯だ人間の英雄を崇拜するの念のみ盛んにして、靈性の上は感ずると深きものに至りては、エルサレムに來れる博士の外、之れ有りしを知らざるなり。基督降世の時、數人の博士、靈性の渴望に導びかれ、奇異なる星の出現を媒とし、眼を西の方、イスラエル人民の神に注ぎ、其の聖王を拜して年來の志を果さんがために、萬里沙漠を越えてエダヤの國に來れり。同一の事實に接しながら、甲は基督に導かれ、乙は依然として迷信疑惑の舊態に安んずるものは何ぞや。靈性の渴望、甲に有つて乙に無きを以てのみ。

博士等は傳奇的の精神に富みし冒險家にてありき

彼等は星を見て長途の遠征を企てたり。彼等は未だ見ざる所のものを

既に見し如くに確信し、萬事を抛つて其の目的を達せんと心懸けたり。彼等は多くの大人聖賢と共に夢の人にてありき。其の渴望するの情切にして道を信ずるの念確實なりしより、終に斯くまで大膽なる舉動をなすに至れり。故郷の天を仰ぎて見たる星は其の途上を照さずなりぬ。彼等は此の光なくして、茫漠たる行程を辿り來れり。其の苦心果して如何ぞや。

彼等はエルサレムに失望せり

都人士は浮薄にして驕奢に流れ、只管ら物質的の開化に熱中するのみ。彼等は道義よりも政略を尊ぶ。滿朝の紳士制度に拘泥し、區々たる典故に束縛せられ、政權争奪の外餘念なし。彼等の最も重んずる所は、機械的にして人を枯死せしむるの治安秩序のみ。故に博士等がエルサレムの聖都こそイスラエルの聖王降誕せし所ならめと想像して來りしにも拘はらず、此には基督を見出ださず、却つてベツレヘムの草廬に之を拜

するを得たり。豈に唯だ東方の博士のみならんや。基督は學者の會する所にて必ずしも之を見出だすべきに非ず。音樂の美、天上も斯くやと思はれ、禮拜の莊嚴おのづから容を改めしめ、巧妙なる説教聽衆をして感嘆の聲を發せしむる大會堂は必ずしも基督の見出たさるゝ所にあらず。ベツレヘムの草廬名もなき木工の謙遜なる家族に於て主耶蘇基督に接せしもの豈に唯だ當年の博士のみならんや。

學者は他人に教ゆるのみ。王は政治的に之を觀察するのみ。エルサレムの學者は賢こげに舊約を繙き、典故を調査して、基督の生る可き所を指し示せり。然れども怪しむべし、彼等はベツレヘムに向ひて一步をも運ばず。博識精通よく遠來の人を満足せしむれども、彼等はイスラエルの王を拜せんどもせざりしなり。あゝ横着なる學者、智識に富める不信仰の神學者なるかな。道を傳へて自らは愈よ道に遠ざかり、基督を指し示して其の精神は愈よ基督を去る。是れ我等の深く戒慎すべ

き所に非ずや。宗教は靈なる心を以て研究すべし。神を説き基督を論ずるも、宗教的の心懸け有るに非ずんば、萬巻を讀破し、研究年を累ぬるも徒勞に屬せざるを得ず。ヘロアの如き以て我等の鑑戒となすに足るべし。彼は靈性の渴望を有する人類としてに非ず、唯だ政權を維持し、秩序を保つを主眼とする政治家として、博士等の問ひに傾聽し、其の來意を訊問したるのみ。斯の如くして道に達せんと欲するは、轅を北にして南に往かんとするに異ならず。また陋ならずや。

博士等は徒手にして基督を訪はざりしなり

彼等は寶の匣を開き、黄金乳香、沒藥など禮物を獻じて其の誠意を表せり。是れ今日クリスマススの節會を祝ふもの、記應すべき所なり。空手にして基督の誕生を祝ふ勿れ。我等は各々分に應じ力を盡して基督に禮物を獻げざるべからず。クリスマススの祝會は各自禮物を贈答して歡を盡し志を致すべきのみに非ず。其の最も心懸くべきは、基督の名に於て

方物を奉つらんとなり。貧しくして唯だレプタを納むる人は、福音書に記載せられし殊勝なる寡婦を記應せよ。或は匣ありて物なき人も之れ有らん。然れども「ロオテ」が言へる如く、我等は物なきも決して徒手クリスマスに會するを要せず。匣は空なりとも何ぞ匣それ自身を基督に獻げざる。物無くも何ぞ身を基督に獻げざる。クリスマススの最も善き禮物は基督に身を獻ぐるとなり。黄金も寶も如何で身を獻ぐるに及ばん。貧家も此の禮物を以て堆かれよ。囊中空しき寡婦も、獻身の禮物他に勝るとを得べし。

クリスマスは吾らが精神上の指南車なり

耶穌基督とベツレヘムの槽！其の權衡を失する何ぞ其れ甚だしきや。新天地の創造は斯の如く着手せられたり。我ら世路に立ち志を興して各自の事業に従ふや宜しくクリスマス

以て、己れの標準とすべきなり。高きに登るは必ず卑きよりす。人に事ふるに非れば之を治むるの地位に立つとを得ず。先づ幼兒となるに非れば、天國に入るべからざるなり。信じて待ち、忍耐して忠實に現今の職守を奉じ、百び失敗すれども尙ほ基督の愛に勵まれて能く其の精神を維持し、己れの愚かなるにも弱きにも屈するとなく、たゞ神國の幼兒として自ら謙り、活潑なる希望を抱き、悠遠なる前途に向ひて邁往すべし。凡そ天國の事業は微弱なるに始る。其の成長漸を以てして且つ隠れたる。我らが己れの僻習と戦ひ、克己して神の道に従はんとするや、其の成功遅緩にして、進歩の見るべきもの少なし。其意氣揚らず、志、屢鈍らんとするのみ。己れの實際を顧みれば、誠に陋にして微なり。争でか此の絶大なる理想に達することを得んや。思ふて此に至れば、氣餒を膺落ちて、茫然爲す所を知らざらん。とす。此の時に當り、ベツレヘムの槽は、精神界に於ける起死回生の神藥にあらずや。

日出で、また入る。百川流れて盡きず。昔し有りしもの、今尙ほ之あり。人生は水車を踏むに異ならず。千轉萬轉、只だ同一の點を旋るのみ。あゝ、陳腐の事業、因循の世界なるかな。區々たる俗事紛々擾々として、何の歸着する所あるを見ず。世は幼稚園の子女が恩物を玩弄するにも似たりけり。然れども賢き保姆は、頭是なき此ら遊戯を爲す間に、大人の資格の作られつゝあるを知るなり。神の羔のまへに立ちて、白き衣を穿ち、黄金の冕を戴き、手に勝利の櫻櫛の枝を取りて、聖歌を唱ふるものどもをして、其の過ぎ來し方を回顧せしめば、彼らは其の事業の陋なりしに驚き、其の戦争の見るにも足らざる小迫り合なりしを怪しみ、其の喜怒哀歡の淺薄なりしを不審ることならん。然れども彼らは之に由りて、其の榮光に進みしものなるを疑はず。

故に吾らをして傲慢を去りて謙遜を學び、主耶蘇基督とよみにベツレヘムの槽に、瓜々の聲を擧ぐるに満足せしめよ。

秘義に充ちたる此の世界に生れ限りなき神のまへに立ち無窮の永生界を仰ぎつゝ瞬間時の五十年を僅かに経過せし我らは實に幼兒に非ずして何ぞや。たゞ基督に由りて幼兒の天真を保ち、從順にして歡喜に充され、活潑にして能く進むもののみ、發達して聖域に入るとを得。

(明治廿九年クリスマス)

神子受肉の理——クリスマスの教訓 (明治廿五年)

神の子人類の間に降下して限りなきの愛を彰せり。人類の罪惡は倨傲自尊なるに在り。人種窄門に由りて、高大の地位に達することを意はず。忝に神の如くならんと欲して、罪を天に獲たり。上帝の救ひは人類をして、倨傲を去りて謙遜を學び、己れを神とせずして、神を神となさしむるに

在るなり。あゝ大なるかな福音の道。人類の倨傲を療さんがために、神人類と成りて降生せり。天も教えず、地も宣はず、唯だ神子受肉の妙理に於て神の愛たるを顯彰すべし。

此の自らを空うして、卑きに居れる神の愛は、實に吾等の摸範とすべき所に非ずや。耶蘇云く我れ爾らを受したる如く、爾らも互ひに愛すべし。此れ我が命令する所なりと。アタナシヤス云く人類神となり得んがために、神人類となりぬるなりと。詩に曰く神の謙虚に由りて、我らは大いなることを得と。其れ之を謂ふか。

物界に於ける神の顯現より、舊約書に記載せられたる啓示に至るまで、凡そ神人類に近付きて、之に自己を顯はすの道は、人類の地位にまで、自己を卑くするものに非るは莫し。時は満ぬ、天國は來れりとあるが如く、上帝の顯現に次第順序あり。まを進歩あるなり。次第とは何ぞや、進歩とは何ぞや、即ち神自らを謙虚りて、人類の地位に下らんとするの傾向

發達に非ずや。此の傾向は宛かも東山の嶺漸やく白く旭日の終に輝き出でたるが如く耶穌基督の降誕に至りて完全す。蓋し言は肉躰となりて人類の間に寓れり、其の榮光を見るに、實に神の聖子なるを疑ふべからず。

神の自らを虚うして、人類の地位に降下せるは此れ同情同感の聖旨に外ならず。試みに思へ、世の中は利己主義の横流する所なり。爾は爾たり、我は我たり。目にて目、齒にて齒を償ふべし。權利こそ重んずべきものなれ。償へよ、我は飽まで之を取らんとは、即ち人間の常態に非ずや。然れども神の言に曰く善を以て惡に勝つべし、敵にして飢ゑなば、之に食ませよ。爾を誼ふものを祝べし。只だ罰を以て惡に處し、鞭撻を以て傲慢を辱しむるは世の常道たり。然れども天の爲す所は之に異なり。自らの謙虚を以て、人類を大ならしむ。教育救濟博愛の事業は、皆な此の神の所爲に摸倣はずんは其の功を奏すべからず。神の子天より降りて我らの侶

となり、我らの兄弟となりたるは抑も明らかに此の大義を擴充するものに非ずや。無限無量の愛は同情同感の事實に於て發揮せられしなり。我らは基督に由りて同情の神を知れり。未だ神子受肉の妙理に由らずして上帝の父たることを悟りたるものなし。

人を教へ、人の利益を圖るの秘訣は忍耐の精神を有するに在り。社會を改良し、國家を治理せんと欲するに當り、前門虎を防ぎ了すれば、後門己に狼の來襲するに遇ふの嘆息は志士仁人千古の愛なり。光り世に輝けど、暗きは之を曉らざるなり。此の非境に哀しむは少にても基督の志を抱るもの、免れざる所に非ずや。哲人は衆に先き立て愛ひ、聖賢は天下の思ひ知らざるの恨事あり。此の心誰とにもにか語らん。我を知るものは其れ天かと言へる如き懷疑的信仰の一念は、斯る境遇に於て發起するものなるべし。故に志士仁人は忍耐の徳飽くまでも堅固ならざるべからず。之を堅固にするの道は神子受肉の妙理を觀察し、天啓教發現の

由來沿革を尋究し、上帝人類を救ふの大御業を窺ひ見るに如くものあるべからず。真理の發達如何に遲緩なりしか。幾箇の預言者之がために殺されしか。地の旋る、天の行く、凡そ自然界に於ける學問の進歩し來れる形跡を見るに、みな寸歩を累ねて千里の遠きに達したるものなり。人類の歴史は一大進化なり。進化の樞機を支配する大造化工の計畫何ぞ其れ長遠なる之に現はる。忍耐の力何ぞ其れ無量なる。化育の力洪大にして驚くべしといへども、其の忍耐の力は更らに驚くべきものありと謂はざるべからず。神か罪人たる我の過失あるをも忍び依へて其の救ひを計しを思へ。其の攝理何ぞ其れ奧妙奇絶にして、長く且つ深きや。彼は雨を義者不義者に降らせ日善者惡者の上に照らせり。

或る人其の葡萄園に植ゑ置きたる無花果樹ありしが來りて之に果を求めども得ざりければ其園丁に云ひけるは我三年來りて果を求めども得ず之を斷り去れ何ぞ徒らに地を塞ぐや園丁答へけるは主

よ我其の園園を掘りて之を培養するまで今年も容せ若し果を結ばずば後に之を斷るべしと。

我らは己れの罪を赦さるゝ如くに人の罪を赦すべきことを主の禱文に於て學べり。基督の降世及び忍耐深き聖靈の導きを見て感激するものは同類の人に對して忍耐すべきことを知るならん。我らは慚く邪僻傲慢に流れ己れを忘れ、神を侮りて、天の赦せるもの人之を支りて赦さざらんを欲するが如き過ち無きを保證すること能はず。宜しく神子受肉の事實十字架流血淋漓尚ほ且つ敵のために神に祈れる基督の膝下に拜伏して、忍耐の道を修め、高遠長大なる神國の事業を負擔し得るの心胸を修めざる可らざるなり。

義を忘るもの人は徒らに愛を説きて、公明なる神國の大道を蔑如するに至らん。窮乏を憐れんずべけんや。我等は惡を惡み、不義を責むるの務を負擔す。宜しく當時の偽善者を憤れる基督の精神を學ぶべし。然れ共爾

なふものも、審判くものも基督に於てし、其の精神を以てすべきなり。ニ
ダヤ人淫婦を基督の許に携へ來り、浮薄なる心を以て其の處置を論ぜ
んとす。主曰く爾らのうち罪なきもの先石を以て之を擧つべしと。之を
聞くもの皆な良心に愧て退ぞき去れり。基督曰く我また汝を罰なはず、
去れ復び惡を行ふなかれと。必らずや此の一言は淫婦を化して高潔な
る婦人となせしならん。

曰く謙虚、忍耐、同情、博愛、公義、温良、此れクリスマス教訓に非ずや。

基督の謙遜

腓立比書は我等の一身上に關して懇切なる訓戒を垂れしものなり。之
を基督教倫理書と見るも差支なかるべきか。其の第二章を見るに先づ

基督教徒が互に一致合同し、教會の團結を堅固親密になすべきとを説
きたり。曰く若し基督に在る勸と愛による慰めと、靈の交と、慈悲と矜恤
とあらば、爾曹意を同らし、愛心を同らし、心を協せて念ふ事を一にし以
て我が喜を満たしめよ。何事を思ふにも黨を結ぶ可からず云々。是れ孰
れの教會、孰れの團躰にも、最も必要なる訓戒に非ずや。特に小黨分立し
て漫りに相争ふは我國民の欠點とも見るべきもの故、社會を救ふの責
任より之を考ふるも、基督教徒は主の聖旨を奉戴して一致團結の精神
を盛ならしめ、以て世の光たり地の鹽たるの天職を完うせざるべから
ず。分争及び不調和の原因は何ぞや。保羅は唯教會に不和の存ざるを戒
しのみならず、其病膏肓に入りたるを看破し、其の原因を摘發して曰
く、爾曹虚榮を求む可らず、謙遜りたる心を以て互に人を己れに優れり
とせよ。又各己が事をのみ顧みず、人の事を顧よと實に然り。謙遜は一致
團結を堅固にするの金鍵なり。高慢は團躰の遠心力なり。家庭も高慢に

依りて破れ、教會も各自己を高しとするに依りて分裂す。我は人を役ぶ
 爲に來れるに非ず。人に役れん爲に來れりと主は仰せられき。此心少な
 き所には、凡て不調子の甚だしきを見る。保羅は斯の如く分争の原因を
 捉え來り、之を救治する唯一の方法として謙遜の心を奨励せしかど、只
 之れにて止まば、佛造りて其の魂を入れざるに似て、甚だ不満足に感ぜ
 らる。故に更に其の説を擴めて曰く、爾等キリストイエスの心を以て心
 とすべし。彼は神の體にて居りしかど自ら其の神と匹しくある所の事
 を棄て難き事と思はず、却て己を空うし、死に至るまで順ひ、十字架の死
 をさへ受くるに至れりと。彼は腓立比人に向ひて謙遜の必要を論じ、其
 の模範とし、且つ之を勵むの動機として、基督の謙遜を説き出せしなり。
 主が受難の一週已に來り、次の日曜日、基督がホザナよと呼はる聲々
 の中に、エルサレムに入城せし日に非ずや。次の木曜日、基督がゲツセ
 マニ園に、血の如き汗を流して祈り、終に出で、從容縛に就きし夜に非ず

や。其の次の朝は主が二兎の間に磔せられし時に相當するに非ずや。此
 際我等が此の問題を掲げて、基督の謙遜を考ふるは最も其の當を得た
 りと云はざる可らず。(此文受難週の起稿に係る)
 謙遜は基督敎固有の道德なり。羅馬希臘の道德を首め、儒敎の教ゆる所
 によるも、亦朝日に匂ふ山櫻に其の風韻を比して、誇稱せる日本武士の
 氣性にも、其の根底の性質として、自尊自大の精神を存せざるものなし。
 其の所謂謙遜と基督の教ゆる所とを對照し來れば、二者の間雲泥の相
 違あるを見出すべし。故に謙遜の徳は基督敎に依りて養成せられたる
 倫理道德の特質なりとするも敢て不可なかるべし。然れども基督自身
 の謙遜を見るに非らざれば、眞個の謙遜なるものは見難からん。謙遜の
 要素本質は主耶穌基督の一身に集まりしなり。吾人其の徳より論ずれ
 ば、皆罪ある者なり。天下一人として完全なる正義者は存せず。其の智よ
 り見れば、何人か天地の廣き神の無限なる靈性の幽微なるに對して、己

の智識十分に透徹する能はず宛から五里霧中に彷徨するの感なきものあらんや。其の力量よりすれば、彼の山下に在りて少年の病を愈し得ざるに赤面せる弟子等と一般誰か人類の無能なるを嘆ぜざるものあらんや。智も徳も力も不充分なる吾等が縦令謙遜したればとて、其は元より當然の事にて、之を謙遜と呼ぶが鳥海がましき次第に非すや。只基督を見るに至り、初めて適當に眞の謙遜と稱し得べきものを見出すべし。神の體にてありしもの自ら其の神と匹しくある所の事を棄て難きと思はず、却て自を虚うし、僕の貌を取りて、人の如くなれり。神が已れを虚うすとは如何なる事ぞ。神學者の議論紛々として未だ一に定まるを見ざるなり。大なる哉、敬虔の秘義、神の子受肉降世せしは謙遜の最も較著なるものとす。神人となるてふ不可思議なる事實に接し、此に初めて無限の謙遜あるに驚く。インカルチーシヨンの秘義、斯の如く謙遜の徳を顕彰せりといへども、吾等は今此點を論ずる事をせず、基督の行狀

に顯はれ、其の人に對して示されたる謙遜を専ら觀察して大に得る所あらんと欲す。
ベツレヘムの槽よりカルバリ丘上の十字架に至るまで、基督の生涯は何れの點か謙遜の徳を以て満されざるものあらん。彼は税吏罪人の友にてありき。彼は叫ぶとなく、聲を擧ぐるとなく、其聲を巷に聞えしめず。また傷める蘆を折るとなく、烟れるほの暗き燈火を熄すとをせざりき。彼は弟子等の足を洗へり。實に彼は僕たるの生涯を送りしなり。其の精神は何を以て特徴とせしや。義なるか。聖なるか。智なるか。主は素より此等の徳を最も美はしく具足せり。然れども自ら己れを説て曰く、我は心柔和にして謙遜るものなりと。約翰獄に在りて、基督の事に疑を懷き、使を遣して言はせけるは、來るべきものは汝なるか。將た我等他に待べきか。耶蘇之に答へて曰けるは、盲人は見跛者は歩み、貧しき者は福音を聞かせらる。我本領即ち此に存す。凡そ我が爲めに躓かざるものは福な

りど。
 基督は斯の如く最も不思議なる謙遜の生活をなせり。然れども其の親しく交れる税吏罪人も、之を汚すと能はず。門弟の足を洗ふも之も辱しむるに足らず。其の謙遜の間に言ふべからざる一種の威嚴榮光を具へしを見る。故に我は心柔和にして謙遜る者なりと述ぶると同時に父は我に萬物を與へ給へり。父の外に子を知るものなく、子の外に父を知るものなしと斷言せり。是れ豈に人類の能く云ひ得る所ならんや。其の談るや、權威堂々として人を壓するものあり。之を捕へん爲に遣はされし吏も未だ此人の如く談りしものなしとて呆然たり。耶蘇を縛する爲め武装して、ゲツセマ子園に來れる兵卒は、其氣高き聲に驚きて地上に平伏せり。基督は謙遜にして威嚴あり。卑きに在りて其の氣品最も高く、僕の貌を以て世に生活する間にも雄大の氣四邊を壓し、堂々たる精神、乾坤を吞吐するの概あり。斯の如きものは抑も何故ぞ。蓋し基督の謙遜は

支那流の禮節より來りしに非ず。子房が圮橋に黄石公に對して謙遜なりし時の如き動機より發せず。和して衆心を繋ぎ、暫く讓りて後に多く收めんとを期する底の事業心より起らず。小人と地位を争ふは徒らに吾心意を疲らすのみ、かゝる事の爲めに屈托する如きは、乃公の屑しとせざる所なりと云ふ如き豪傑者流の意氣より生したるにはあらず。基督の謙遜は神に従順するより來れり。神の意を奉し、一身を犠牲にして天父の聖旨を成就せんと欲する、此れ基督の謙遜なり。主の如く我等も世に在るべしとは、約翰の懇切に教へし所に非ずや。我等は基督を模範とし、其意を以て意とし、世に處し身を修め徳を建て、神の恩寵に答へんと欲する者なり。故に神に従順なる事を以て本質となせる、基督の謙遜を學び、能く人に下りて卑屈ならず、能く税吏罪人と交りて汚されず、僕の貌を以て人間に出入して而も堂々たる氣魄を胸中に湛へんとを期せずんばあらざるなり。基督の生涯は從順の生涯なり。故に又謙遜

の生涯なり。世と推移り時に従ひ、器々たる衆論に雷同するに非ず。敢て人の意を迎へて事を成さんと欲するにも非ず。唯神の意志を奉じて之を遂行せんと欲するのみ。此の従順ありてこそ能く此謙遜を現はすとを得るなれ。希伯來書に曰く、基督は子たれども、受くる所の苦難に依りて従ふとを習ひたり。五の八、羅馬書に曰く、基督一人の順によりて多くの人義とせられたり。五の十七、耶蘇ヤコフの井にサマリヤの婦と談りし時、門人の怪しみ見るに答へて曰く、我を遣はせし者の旨に従ひ、其行を爲す。此れ我糧なりと。基督の一生は己の意志を棄て、神に従ふを以て一貫す。此杯を我より離らせ給へと祈る時にも、尙ほ敢て我が意を行はんと欲するに非ず。聖旨の儘になし給へと言しに非ずや。基督は常に其意志神と一致する事を心懸けたるが故に、神交默契事ごとに神の聖旨の存する所を窺ひ、之に適合して誤まる所なかりき。曰く、實に實に爾曹に告げん。子は父の行ふ所を見て行ふの外は、何事をも行ふと能はず。

其は凡て父の行ふ事を見て子も亦行へばなり。父は子を愛し、凡て己の行ふ所の事を之れに示す。約翰傳五の一九、二〇又曰く、我何事をも自ら行ふと能はず。聞く所に従ひて審判さす。我が審判は公正し。我已が意を行ふとを求ず。我を遣はせし父の旨の行ふとを求む。同三〇又曰く、我爾曹に就きて談るべき事と罪を定むべきと多くあり。我を遣はせしものは誠なり。之に聞きし事を我は世に告ぐ。我何事をも自ら爲さず。唯父の教に従ひて此事を云ふ。我を遣はせしもの我と共に在り。父は我を獨り遣き給はず。そは我れ常に其の心に適ふ事を行なへばなり。同八章二六、二八、二九又曰く、我已れより之を言ふに非ず。我を遣はせし父、言ふべき事、語るべき事を我に命じ給へるなり。其の命じ給ふ所は、即ち限りなき生命なるを我知る。此故に我が言ふ所は父の告げ玉ふ儘に言へるなり。同十二章四九、五〇。基督は天父と神交默契して己れの意思を張るとなく、唯神の聖意を奉じて、其の出處進退を決したり。其の一言一行、苟も神

に順ならざるものなし。事小なりとして己の志を恣にせず、我が希望如何に切なればとて、敢て漫りに之を遂げんとを勤めず、靜に神の意志を察し、唯其命ずる所に赴けるのみ。以賽亞此の理想を發揮して曰く、其の上にエホバの靈留まらん、此れ智慧聰明の靈謀畧才能の靈、エホバを畏るゝの靈なり。彼はエホバを恐るゝを以て樂とす。漫りに其の目見る所に依りて審判をなさず、其の耳聞く所に依りて斷定をなさずと。(イザヤ十一の二三)己の目見る所耳聞く所を主張せず、唯天父皇上帝の旨を奉じ、虔みて之を成就せん事を勉め、エホバを恐るゝを樂とす。故にエホバの靈即ち智慧聰明謀畧才能知識の靈、其の上に留まりしなり。活動的なる無我從順の境に達すると、斯の如くなれば心寛く、軀豊かに柔和謙遜にして、而も氣宇高尚、心志豪傑なるを得へし。吾人の一生は正に斯の如くならざる可らず。平生の鍛鍊、祈禱、黙思、習熟の功程を経て、神の聖旨を知り、克己して之と合し、成るべくは勉めずして、神交默契の結果自ら之と

一致するとを期するは、基督教者從順の道謙遜の精神なりとす。是れ最も偉大なる精神なり。最も淳良温恭の精神なり。大人にして赤子の心を失はざるもの即ち是なり。正氣も浩然の氣も此間に存す。武士の氣性も基督の靈にバプテスマを受けて此極に達すれば、其の弊を除かれ、其の長所を啓發せられ、美を成し、善を遂げて十字架の下に發達するを得べし。儒者の禮節も基督の謙遜と接木せらるゝの榮を擔ふに至り、野生の葡萄初めて香味美はしきものと化するとを得べし。此の美はしき謙遜の前に出づれば、王侯の金冠も其の光を失ふ。武夫の勇も稱するに足らず。人間の榮華其の眞價を評定せられて、基督の十字架獨り尊きを見る。

- 一 うつりゆく世にも ひとりそびゆる
- 主の十字架にこそ われはほこらの
- 二 みふみのひかりは つみをあがなふ

又

十字架のうへにそ

みなあつまれる

かみよわれを

みちびきゆけ

われたと主の

みちをあゆまん

いかにくらく

けわしくとも

みむねならば

われいどはし

主よのむへき

わかさかすき

とりてわれに

さづけたまへ

よろこびをも

かなしみをも

みたしめ給ふ

まゝにそうけん

是れ基督教者が其の主の精神に同化せられて己の志す所を歌ひしもの
に非ずや我等未だ行ふと能はずと雖願ふ所は此精神に學びんと欲
するのみ嗚呼謙遜の生涯は従順獻身の生涯なり義を取り仁を爲し自

らを犠牲に供するを厭はざるの生涯なり萬事に就きて神の聲を聞き、
出處進退凡て道念の指導する所に従ひ、一毫も私なからん事を期する
の生涯なり謙遜と威嚴は眞に基督に依るもの、額上に輝く。パウロ曰
く基督は己れを虚うして僕となり、死に至るまで従ひて十字架の死を
さへ受るに至れり故に神は甚だしく之を崇めて諸の名に勝る名を之
に予へたまへりと。

今日(ケアド、フライデイ)は主が十字架に死に給ひし日にて、明後日の聖
日は其の復活したまへるイ、ステルなり。一は以て大いに信み、一は以て
大いに喜ぶべきの日に非ずや。

ゴ ル ゴ タ の 丘

不法なる審判きと無情なる宣告に由り、基督は自ら十字架を背負ひ、有司兵卒どもに引き立てられて、城門を出で、都の傍りなるゴルゴタの岡にぞ着きたまふ。今までは群衆に紛れて、誰彼の差別も明かには知られざりしが、此に至りて附き來し人を見渡したまへば、中に數人の婦女等涙に咽びつゝ、遙かに事の襟を見て居たり。此はかねてより主の恩寵を被りし人々にやあらん。十字架に懸くる用意なりとて兵卒どもの罵り、噪ぎ、身の毛もいよ立つ刑の具を取りて、ひしめく事狀見るにつけても、氣も消え、腸も断るゝばかりに感ぜしならめ。主は斯る最中にも人のために己れを忘れたまへり。其の世を去りたまふ時の聖旨は、曾てガリラヤの湖邊に勢ひ盛んなりし日と異ならず。歎きに沈める婦人等に向ひて宣はく、エルサレムの女よ、我がために哭する勿れ。爾らと爾らが子らのために哀しむべし。見よ此のエルサレム城が例なき災ひに罹りて亡び、人民の惨苦言ふに忍びざるの時期遠からずして來らんと。基督はエ

ダヤ人の罪惡極りて、無殘なる結果を見るに至るべきを預知し給ひて、此の際にも深く聖慮を傷めたまひしなり。順がて彼らは主の御身を十字架に付けたり。御手も御足も釘に貫れり。處刑の模様言ふに堪へず。聊かにても其の苦痛を軽くせんためか、感覺を痴鈍ならしむる飲料を持ち來りしかど、主は之を卻けたまひぬ。心正かに精神終りまで明白にして、從容苦痛と戦ひ、靈なる勝利を獲んと欲するの思召なりしと知られたり。堂々たる萬物の靈長たらんものが艱苦に堪へかぬるとして世の痴漢等が所謂愛の玉帶てふ酒に助けを乞ふこそ殘念至極に非ずや。臨場の有司刑を執行する下官らは、侮慢殘念の相貌著しく宛ら牛羊を屠るが如く、人の子を十字架に附けたり。人心の暗黒あやめも分かず、感情の曲みたる、此に至りて其の甚しきに達したりと謂はざるべからず。主は深く此の狀を悲しみ、天を仰ぎて宣はく、父よ、彼輩を赦したまへ、其

の爲す所を知らざればなりと。人心反覆の峻しきも、耶蘇が至愛の情を障ぐることを能はず。無限の愛は佞邪殘忍の人情のまへに辟易せざるなり。有司兵卒勝ちたるか否な、勝利は基督の手に歸しぬ。あゝ彼は十字架に縛られつゝも、斯くの如く祈りを爲せり。其の靈魂何ぞ其れ大なるや。血は流れて淋漓たり。身軀の苦痛比へんに物なし。身邊の事何れを見ても、悲哀と罪惡とのみ。左右には二人の賊主とともに磔刑に處せらる。十字架のもとには、兵卒ども耶蘇の衣を鬪取にしつゝあり。十字架の下に在て賭博を行ふ、是人の真相なるか。堵の如く群る人々のうちにはたゞ無心にて見物したるものもあらん。然ども其が前に立ちたるは、姦曲無情の小人舌を吐き、頭を振り、眼を睜り、嘲笑の聲を揚て、榮の主を辱しめたり。貴きも、卑きも、今は早や、獸の心を暴露して口々に叫びけるは、爾他人を助けたるに、何んぞ己れを救はざる。疾々十字架を降りよと。耶蘇の祈りと彼らの惡言と、何ぞ其の相隔たるの遠きや。

徳孤ならず必ず隣あり。此の世界は唯だ罪惡のみの横流する所にはあらず。現に視よ新なる人類の首長として、耶蘇の祈りに無限の慈愛溢れ出でたるに非ずや。共に磔殺せられし賊の一人、主の温容盛徳に感じ、その神聖なる威嚴に服して、前日の非を悔み、理想の光に打れて、悠遠愉快なる冀望を生じ、主を信じて曰く、余等の此に至るは一に自ら招く所、また誰をか怨みん、然れども此の人は實に罪無しと。ユダヤの政府滿廳の判決は土芥の如く、罪を悔みたる賊の宣告は大山よりも重し。彼は更に耶蘇に向ひて言へり、主よ、爾聖國に至らんとし、我を記憶よと。死なんとする救主は、此人の罪惡に勝ちぬ。之に應へて宣はく、今日爾は我ととも、にバラダイスに居らんと。主は彼らの挑める如くに十字架を降りたまはず。然れども之に懸られつゝ人々を赦し、且つ其の罪惡を救ひたまへり。釘に貫かれたる手は、死ぬまじき靈魂のために、天の帷幕を開きしなり。之を神の如き能力なりと謂はざるべけんや。

但だ見る、三個の婦は一個の壯漢に助けられて、力なげに出で来れり。あ
 ゐ其の一人は耶蘇の母マリヤなり。昔し老ひたるシメタンが預言せし
 如く、彼の心は眼前劍にて刺されたり。クレテバの妻も、マクダラのマリ
 アも、主の愛せし門徒ヨハネも、もに来れり。勇氣あるペテロは何所に
 在る。共に死なると言ひしもの何れに去りしぞ。愛の至誠は世の猛夫に
 勝れる勇氣を柔弱なる婦女の心胸に吹き込みぬ。耶蘇之を見て、大いに
 感動し、其母に宣はく爾の子を見よと。此れ今よりのちヨハネを以て子
 とし頼よとの義なり。またヨハネに宣はく爾の母を見よと。此れ母の身
 上を節義に富る士に托するの遺言に非ずや。十字架上の一言腐儒曲學
 の萬語よりも重く、其の孝道を扶植するの力得て量るべからざるもの
 あり。
 斯くて十字架に懸られしより二時間を経たり。死は既に迫り来りぬ。時
 に天色朦朧として、乾坤暗澹たり。後に至りて地震の起るべき兆とこそ

は知られたれ。是れ十字架の出来事は天地を悲慟せしむべき程の大變
 なるを示せるものと見るべきなり。今や耶蘇の靈肉まささに相分れ
 んとす。死期近か付くに從ひ、天地漸く微かに、親しきものも次第に見え
 ずなり行き、神も萬類も意識の上より消滅し去らんとす。死時の寂寥は
 如何ならん。神にして、人なる主耶蘇は今まさに此の境遇に立ちまたへ
 り。渴すれば、水をサマリヤの婦に求め、飢れば、食を門弟子に請ひたまふ。
 靈魂飢渴して、安慰を要すれば、聲を發ちて、之を天の父に求めたまふ。前
 者後者の別實に五十歩百歩の間に過ぎざるなり。主此に於て詩篇の語
 を誦し、吾が神よ、吾が神よ、何ぞ我を棄て去るやと叫び給へり。其の苦痛
 其の寂寥、其の愛悶察するに餘りあり。此の一言に由りて、天地も震ひ動
 かん。とす。况んや活ける愛なる神をや。神は之に大いなる慰藉を與へた
 まへり。
 氣息奄々、口のうち乾きて、水を求めて宣ひけるは、我渴きぬと。咽喉を濕

したるのち、父よ我れ爾の手に吾が靈魂を附すなりと呼はりたまへり。さきの祈は聽れたり。主は父なる神の愛に其の靈魂を托したまへり。基督の心胸は、此の逆境に於て光風露月の若く名狀すべからざるの平和を抱きたり。つひに叫んで宣はく事了りぬと。即ち靈魂を神に附して、氣息絶えたまふ、あゝ尋常の死に非ず。百夫の長は右の始末に注目し、大いに悟る所やありけん。是れ實に義人なりと絶叫せり。民約論の著者ルウソウは更に一步を進めて曰く、ソフロニカスの子(ソクラテス)の死をして哲學者に適しきものたらしめば、マリヤの子は實に神の如くに死にたりと謂はざるべからず。

事了りぬ。愛の勝利は全きに至れり。贖罪の功は成就せり。十字架上の賊は、主の恩寵に由りて罪惡を赦されたり。凡そ基督を信するものは、みな主の死に由りて其の罪惡を赦され、爽快なる理想を明かにし、神の國に進むの希望堅固なることを得んとす。

氣息已に絶えたりと見てしかば、兵卒ども鎗を以て其の脇腹を貫ぬきしに、血と水と流れ出でたり。アリマタヤのヨセフはピラトの免許を獲てニコデモと共に主の遺骸を其の新しき墳墓に葬りぬ。主の十字架に懸りたまひし後に至り、今までは臆病にてありしニコデモ俄かに變りし人の如く怖るゝ色もなく、其の葬りに與りぬ。『若し我舉られなば萬民を曳き寄すべしと。』其の引力已でに活ける働きを示せるに非ずや。基督豈に死に制せらるゝものならんや。

主の復活と人生

使徒パウロは復活を説くに當り、常に其の能力を知ると云ふことに重きを置きぬ。(ヒリビ書三ノ十)復活の能力を知るとは何ぞや。蓋し耶穌

復活の事實をば一個の歴史的問題とのみ見做して、之を知り得たれば
 として、之を以て眞に基督教徒となりたるものと思ふべからず。之を事實
 として信じ、之を信するがために、其の身にも心にも、大いなる變化起れ
 るを覺え、主の復活てふ事實は吾が胸中に於る一個の活力として著る
 しき結果を呈するに至る。是に於て主の復活を信すること始めて完し
 と謂べし。

試みにパウロ其人を見よ、彼は主の復活を以て、彼の一時の出事來なり
 とせず、此れ其の目前に活動しつゝある能力なりと思へり。其の性行は
 之を信するがために一變せり。其の神學は此の信仰を以て充滿せり。彼
 思へらく、主の復活に由り一大勢力は世界の歴史に注射せられ、靈界の
 活動之より無窮に達するものあらんと。パウロの書翰は此の思想を以
 て其の議論の中心點と爲すものに似たり。
 罪惡の勢力世に蔓りて、吾が心の内外に於ける不義の熱火焰々たり。理

想と實際と日々遠く、義の世界は杳として、見るべからず。世は果して
 正しくなるべき乎。我が人生の目的を達するの期果して待たるべきか。
 生命の歸趣如何ん。罪惡に勝つる能力如何ん。若し主の復活を信じ、其の
 能力を躬に經驗するに非ざれば、明確なる答を此らの問に與ふること
 能はざるべし。主は復活して義人の死に制せられざるを明にし、其の活
 ける感化は至大の靈力として、世に存し、我らのうちに在りて働き以て
 義を大成せしむべきとを證しせり。蓋し此の身死すといへども、靈魂永
 く死せざるの理は主の復活に由りて、歴史上の事實となりぬ。決して哲
 學者の推究のみに非るなり。哀別離苦の愛あるものは、イ、ステル、日曜
 日の朝、其の死に亡せし故人舊友を追想するに當り、大いに心を慰むる
 所あるべし。然れども、基督の復活はたゞ未來に關するの眞理のみに非
 ず。其の復活は現今に係り多きものなるを記應せざるべからず。ラザロ
 の死にし時、基督は復活の事を以てマリアを慰めたり。マリアが然り未

の日には必らず復活すべしと答へしを更に論けるは我は後の復活たるべきのみならず、また現今の復活なり。我を信ずるものは死すといへども尙生くるなりと、主に在るものは現在の身に於て、已に死に打ち勝ちて復活したるものなり。其の肉體はラザロの如く墓を出でざるも、其真正の生命活潑なるものあるなり。豈に之をしも死と謂ふを得んや。然かのみならず、吾らは基督の死に由りて、赦罪の道あるを學び、其の復活に由りて、人心更生の活力存するを知りぬ。基督罪に勝ち、死を制し、最も切なるの愛を以て、現に生存し、我らとにもに、また我らのうちに働きつつあり。彼は現に存するの救主なり。此の信仰は、哀むもの、安慰望を失へるもの、光明罪に憫むもの、元氣なり。眞に此の理を悟るは此れ所謂復活の力を知るものに非ずや。

且つ罪惡の苦痛を感ずること薄く、人生の理想に其の心を刺れ漸く意を決して福音の道を信ぜしものに非ざれば、復活の事實を證明するに重大の關係ある個條を調査するの便を缺り、已に復活の能力を知るものは、よし他の舉證に於て充分ならざるも、自家經驗の左證隠べからざるものあるなり。基督に癒されし盲人曰く、彼が罪人たりや否やは我が得て辨明せんとする所に非ず。然れども一つの事は、我に於て疑を容るゝの餘地なしとす。我は盲目なりしが、今は彼れかために見ることを得るなりと、パリサイの徒も此の議論には抗すること能はざりき。基督復活の能力を知るものは、罪に對し、愛に對し、世の失敗に對し、またあらゆる議論に對して、少しも恐るゝ所なきなり。

聖受難週所感

木曜日の夜、耶蘇縛に就かれ、祭司長の邸に吏かれ、羅馬方伯の法廷に審問宣告を受け、此の金曜日、朝終に十字架に付けられて、アリマタヤのヨセフが新墓に葬られ、了んぬ。是れ耶蘇の門徒の頭上に、恐る可き強大なる打撃を加へしとなり。彼等は牧ふ者なき羊の如くになりたり。彼等はその團體を繋ぐべき鞏固なる組織を有せざりき。彼等は其の頭首を失ひて支離滅裂の有様なり。年來彼等が熱心に従事せるイスラエル王國の大事業は、忽然晝餅に歸し、其の胸中に躍りたる希望泡沫と化しぬ。然れども彼等が尙ほ思ひくりに四散分離せずして一所に止まり、踏みこらへて復活日曜日の味爽に達したるは、其の志堅固にして品性甚だ高潔なりしものあるを證す。我等は十二徒以下の狼狽せしを見て、之を卑怯なりとするを常とす。然れども之を非難すると同時に、上に記載したる如き事情をも考がへ、耶蘇平素の教育を思ひやりて、其の感化の深

きと、門人等の人品高尚なりしとを忘却するとなきを要す。

或人の説に、福音記者耶蘇の縛に就きてより復活の朝に至るまでのとを述ぶるや、己れ等に關するとは、ペテロが三たび耶蘇を知らずと言ひしと、十字架の下なる使徒ヨハナに其の母を托せられしこと、の外、絶えて記するものあるを見ず。彼等がゲツセマテ園を脱れ去りし心事は、如何なるものにてありしか。彼等は主の殺されんとするを送りてカルバリーに到り、衆どもに其の最後の様を見てありしならん。彼等の所感は如何にありしや。己れ等の地位を明かにし、前夜の離散を説きて、其の面目を保たんがために言はんぞ欲せし所のともありしならん。次の日曜日は猶太人の聖日にて、一同靜肅なる時間を與へられ、皆な集りて共に語り共に祈りしとならん。ベテロは如何なる感懐話をなせしか。主の懐に倚れるヨハナは如何なる懷舊談をなせしか。此は我等が切

に知らんと欲する所に非ずや、然れども四福音書は右等のとに付て、我等に満足と與へざるなり。蓋し彼等は主の事と其の復活とに關する思想感情胸に溢れて、餘事に及ぶの暇なかりしものか。此の一事に付きても、弟子等當時の有様と其の心の高潔なりしとを推測するに足らん。

約翰傳十三章に耶蘇晚餐の席上に弟子の足を濯ひたりとの記事あり。是れ實際の所作に演ぜられたる比喩にて、意味甚だ高妙なるものあり。弟子等互ひに其の優劣前後を争ひて餘念なきを見、耶蘇は自ら僕の狀となりて、彼等の足を濯ふ。且つ我等世に在るや、たとひ基督を信ずるも、因襲の然らしむる所、從來の弊に蔽はれて、心にもあらぬ罪を犯し、過ちに陥あるとあるを免れず。之が爲めに屢己れの非を顧み、過ちを悔み、神の赦罪を深く心に感銘し、罪を悔ゆると同時に、精神活潑にして徳を完うするの志愈よ強からんとを要す。左れば兄弟姉妹たるものは、互に過

ちを赦し、相規諫し、切磋琢磨して、罪に勝ち、過を改め、志を奨勵し、之に天父の救ひを示して、慰めを興ふるとを心懸けざるべからず。主耶蘇の我等に向ひて、互ひに足を濯ふとを教へられたる本旨實に此の點にありと思はる。パウロ曰く兄弟よ若し測らずも過ちに陥あるものあらば、汝等のうち靈に感じたるもの柔和なる心を以て之を正す可し、又自らをも省みよ、恐らくは汝誘はるゝとあらん。汝等互の勞を負へ、斯くして基督の律法を全うすべしと。あゝパウロの如きは眞に耶蘇の教を奉じ相互ひに足を濯ふとを力めしものに非ずや。

シモン、ペテロは三たび耶蘇を知らずと言へり。彼は朴直剛毅にして氣象實に愛す可き人なりしかど、兎角物に惚つるの癖あり。耶蘇波に親して來れるを見て、之を喜ぶの餘り自ら請ひて波の上に降り、主の端然立ち給ふ所に至らんとせしが、波騒き風吼え暴ぶるに驚き、忽ち沈まんと

しければ、狼狽して主よ我沈まんとす、助け給へと叫ひぬ。アンテオクに在りて異邦人と席を列ね、食を共にするに當り、偶々猶太より人の來れるに遇ひ、遽かに其の席を脱して隠れしとあり。彼は之がためにパウロの詰責を受けしと見ゆ。使徒ペテロは美質多き善き人なりしかど、容易に感情に制せらるゝの人物にて、事に觸れ物に激して、動もすれば其の精神の度を失ひ、方寸の取り締り弛みて、いつしか不思議なる過失に陥るを常とす。彼が弱點は、屢一種のあはても、のたりしにあり。斯の如きは豈に獨りペテロのみならんや。

彼が三たびまでも耶蘇を知らずと言ひしは、身の危うきに陥らんとを恐れしに非るなり。主の門人、其の他の關係者までも捕へんと企つるときは、由々しき一大事を生ずるに至らんこと、鏡にかけ見る如し。奸智に老けたる祭司長等、豈に斯る愚をなさんや。且つペテロ、ヨハネが祭司長の第宅に入りしこと、及び弟子等が耶蘇の十字架に従ひ行きたりし

を見ても、左襟なる危険なかりしを知る可し。主と共に死なんとを誓ひ、驚破と言ふ場合に、刀を抜き敵を斬らんと擬せしペテロは、唯だ耶蘇の先途を見とけ、妨げられずして法廷の邊に居らんことを希ひしのみ。見露はされては所詮其の事も叶ひ難からんとの氣遣ひより、左までの罪とも思はず、前後の分別も定かならず、心の度を失ひて、唯だ漫然主を知らずと言ひしならん。故に彼方此方脱けつ、潜りつして、強情にも耶蘇の先途を見とけ得る邊に踏み止まりしなり。豈に憶病なるもの、所爲ならんや。敵に向つて眞實を語るの義務なしと言へる非基督教的道徳に支配せらるゝ普通の人情より言へば、誰かペテロの言を怪しむとをなさんや。

然れども此の時ペテロは他に向ひて己れの信念を告白し、主に對する其の關係を宣言して、一個の立證者となる可き機會を失へり。難は三たび鳴きぬ。法廷に立てる耶蘇の一顧は心躁けるペテロをして

我に立ち反らしめたり。彼は主の戒めを思ひ出で其の愚かなりしを悔み、其の理想の明かならざりしを嘆き、慚愧に堪へずして打ち泣きぬ。

復活節

耶蘇復活の後、屢弟子等に現はれて之と親しく物語りをせられたり。其の教訓及び舉止言動深く彼等の心に感銘して、消え失せざる痕跡を留めしとならん。此の事に付きて後世の我等感ずる所少からず。取り別け耶蘇が一回も其の反對黨に現はれ、彼等の膽を冷やし、彼等の良心を刺し之をして慚愧措く所なきに至らしめたる等のとなく、一言もユダの口に説き及ばず、一句もパリサイの罪惡を數ふるとなかりしは不思議と言ふも愚かなり。唯だ其の語る所は弟子等の慰撫獎勵なり。其の説く

所は神の國のみ。基督は紛々たる世の利害鬭争の上に超然として卓立し、弟子等を教育し、天國の事に心を専らにしたるが故、斯る事柄には苟しくも其の思ひを及ぼすの暇なかりしなり。其の高潔偉大なると驚くに堪へたり。此の一事我等をして耶蘇の品性絶倫なるを感ぜしむ。

復活の後、幾程もなく弟子等はガリラヤの故山に歸り暫くの間は團體を解散して各自其の家々に落ち着きたるものゝ如し。蓋し彼等は神の國てふ理想に付きて其の精神を攪亂せられ、茫然自失して之が解釋に惑ひ、殆んど爲す所を知らざりしなり。耶蘇門徒を教育するや、自然の開發に任せ、事實に接し、實驗に徴して、非を悟り正に歸し、漸を以て着々進歩啓發せしむるの方法を取りたり。神の國に付きては豫ねて弟子等の思想未だ世俗の範圍を脱却せず、世の榮華物質上の威力と纏綿して離るゝと能はざりき。然れども基督は敢て之を論破するを試みられず。

徐ろに其の精神を教養し漸く其の倫理の理想を高尙にするの運びをなせるのみにて、結局人の子奸吏の手に付され、隠謀權略に羅織せられて、十字架に就くてふ事實自ら之を啓發するを待れしものと見るも不可なからん。基督の十字架と復活とは、千言萬語を繰り返すよりも遙に力ある教訓を彼等の心に與へたり直に紛々たる世に出で活劇場に入して戦鬪に従事するとあらんには、如何で此の教を咀嚼し、其の意義を心に消化して、真に之を己がものとし、以て他日驚天動地の功業を立つるの準備をなすとを得んや。彼等はガリラヤの湖邊、水清く山高き邊に退ぞき、或は魚鰕を侶とし、吠畝の間に逍遙して、近き數日間の意外なる出來事を思ひ回らし、沈潜反覆して其の意義を考へ、其の新たなる經驗を整理し、其の心の態度を取り直し、以て戦鬪の狼煙高く揚りたる彼のペンテュストの日を迎へんとて、エルサレムに上るの準備をなせり。是れ精神を修養し、靈性をして一大進歩をなさしめんと欲するもの、

常に遵奉すべき千古不磨の規則に非ずや。年々歳々イ、ストルの來ると同じといへども、此を迎へて深く感化を受くるもの少きは、蓋し弟子等の如き用心なをき以てに非ずや。

復活日の朝、我等福音史を讀み、路加傳第二十四章に至れば、則ち記して曰く、

七日の首めの日昧爽に、此の婦人等調へ置きたる香物を持ちて墓に來りしに、外の婦人等も共に來れり。彼等石の墓より轉ひたりしを見て、入りければ、主耶穌の屍を見ず。之のために狼狽へ居りしに、輝ける衣を着たる二人其の傍らに立てり。彼等恐れて面を地に伏しければ、其人言ひけるは、汝等何ぞ死にたるもの、内に生きたるものを尋ねるや。彼は此に在らず。甦りたり。曾てガリラヤに在りしとき、汝等に語つて、人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架に付けられ、第三日に甦る可しと言ひたりしを憶起せよ。彼等其の言を憶起で、墓より歸りて之を皆な十一の弟子、外の弟子等に告ぐ。是れ等のとを使徒に告げたるものは、マクダラのマリヤ、ヨハンナ、ヤコブの母なるマ

リア、又外に俱にありし婦人等なり。

此の味爽の出来事は、先づ弟子等の胸中に大變革を來たし、次で世界の局面を更たむるに至れり。故に希伯來書に曰く、願はくは限りなき契約の血に頼りて羊の大牧者なる我等の主耶穌基督を死より甦らせし平安の神耶穌基督に由て其の悦ぶ所を汝等の心の衷に起し、又汝等をして其の旨を行はせん爲に凡ての善き事に於て汝等を全うせしむべし。榮光彼に歸して世々限りなからんア・イ・メン(十三章廿、廿一)復活は主の悦びを我等の胸中にも與へ、精勵奮起して神の旨を實行し、凡ての善き事に於て全きを期せしむべき一大勢力なり。

夫れ人の世は重きを負ひて峻坂を攀ち登るか如し。不撓不屈の氣力を抱き、逆境にも順境にも毅然として獨立し、成敗利鈍に拘はらず常に歡喜するの用意なくんば如何で能く人生に處するを得んや。移らざるの歡喜、動かざるの志氣、嚴肅なる樂天の氣象は是れ我等の缺く可からざ

る所に非ずや。

輕躁浮薄にして無頓着を裝ひ、自然を樂しむと稱して、時をも慨かず、世をも憂へざるものゝ如きは、我等の輕蔑す可き樂天家なり。此の罪と悲との充ち溢るゝ世の中に在りては、幾分か厭世の心を具ふるを當然とす。然れども一點の微光胸中に存し、暗中尙ほ遙かに東方稍白きを望むの信念覺悟なくんば何を以てか能く健全にして成功ある生活をなすとを得んや。

我等をして不撓不屈の精神を持し、あらゆる境遇に處して歡喜勇奮せしむるに必要なる條件は、少なくとも次の二つのものを具へざる可からず。人生の貴高なる目的及び之を成就するに足るべき能力即ち是なり。

我等は何のために生き又死して何を成就せんとするか。是れ千古の大問題なり。一事一業をなし、或は目前の功を建つるが如きは、未だ以て人

類の高貴なる目的と言ふに足らざるなり。我等は業を修め志を成すと然らざるとに拘はらず、疾病にも健全にも生にも死にも共に其の成就を期し得べき最大目的あるを要す。希伯來書記者の所謂耶蘇基督の旨を行ひ、凡ての善き事に於て自らを完うし、榮光を神と基督とに歸して、世々限りなからんこそ是れ人生の最大目的にあらずや。所謂業成り名を揚ぐるの目的に於て失敗するとありとも、此の最大目的を確定し、着々之に向つて進行するものはなほ、胸中言ふ可からざるの安んん。

たどひ我に此の目的ありとするも、天人力を協せて我に不利ならば如何。我等此の場合に於ては、唯だ空を撃ち、徒勞に従事するの外なかる可し。斯くては唯だ運命を嘆き、宿縁を憤り、天を怨み、人を咎め、愛憤悲哀遣る方なく、氣餒を神疲れ、志鈍りて、靈性上の死者となり、了らざるを得ず。故に我等は人生の目的を定むると共に、之を實踐躬行するに必要なる

能力ありて存ずるを認めざる可からず。凡ての事は神の旨に由りて招かれたる、神を愛するものゝために、悉く作用きて益をなすを我等は知り、れりと斷言せしものは、パウロなり。此の信念あるが故に、彼は善く自らも歡喜し、人に向ひても常に喜ぶべきとを勸告するを得たり。人生は目的を要するのみならず、亦之を成就すべして、希望をも要す。高尚なる目的を抱懐し、理想を肺腑に銘じて、之を追ひ求め、加ふるに、天父ありて我を鼓舞督勵し、之を成就するに必要なる力を與ふべしと、確信するは、人心發達の二大條件なり。

基督は神の意志と合するとを勉め、常に其の旨に遵ふとを怠らず、實に善を躬行し得たる人なり。曰く父の旨をなす、是れ我が糧なりと。基督の一生を觀察すれば、人生の目的何れに存するやを知る可し。主は此目的に向ひ、邁往直前して、終に死を透ぐるに至れり。然れども、天何ぞ之をして空しく死なしめんや、彼は甦りて罪の力、死の力に勝ち、天に昇りて神

の右に坐す。彼は現に生きて存じ、以て我等に人生の目的を教へ、之を成就するに必要なる勢力の無盡藏とはなりぬ。基督の復活は我等を奮興せしむる事實なり。故に曰く耶蘇基督を死より甦らせし平安の神、其の喜びを我等の衷に興し、我等をして其の旨を行はせん爲、凡ての善き事に於て我等を全うせしむべしと。來れ我等イ、ストルの佳節に當り、復活の力を受け、新しき元氣を蓄へて、新しき世界に各自の立場を確定したとひ微なりと。雖も己の本領に安堵して、神の意志を實行するとを得んアインソ

復活の信號

夫れ進歩は大いなる目的を有し、之を成就するを得との確信希望ある

に非ざれば、到底期す可からざるとなり。基督の復活は我等に此の目的を興へ、此の確信を生ぜしむるものなり。基督教が進歩の原動力たる所以、此に在りと謂ふべし。

耶蘇復活して墓に在らず。其の徒墓前に狼狽して、計の出づる所を知らず。天使之に告げて曰く、何ぞ死し者の中に生ける者を尋ねるやと。此の詰問は余輩をして頭迷保守戀舊の夢を破つて、進歩開創の途上に鋭意興奮せしむるの聲なり。後にあるものを顧みずして、唯だ前にあるものを追ひ求むべしとは、パウロの教訓にして、基督信徒の平素心懸くる所に非ずや。死者をして死者を葬らしめよ。失敗の跡に踟躕して、己れのために新田を開墾し、別天地を創起するの考へもなく、茫然自失して死たる兒の年をのみ數ふる如き愚を學ぶ勿れ。祇園精舎の鐘に泣くものは、然かせよ。イ、ストルの凱歌に目を醒せるものは、然かする勿れ。基督教は夕に響く遠寺の鐘に非ず。復活の朝、天地に響きわたる讚美の聲なり。

事業に失敗せるものも、復活節の氣力を帯びて再び限りなき進歩の途に上れ、親しきものに死に別れしものも、復活節の空しき墓に詣で、不朽の世界あるを喜びとせよ。罪に慨き、道德の失敗に落膽するものよ、主眞に甦れり。彼はシモンに現はれたり。三たび耶蘇を知らずと言ひて、鶏鳴に腸を破られたるシモンも、之れかためて奮起して大いなる人となりしに非ずや。陳套を墨守し、悪しき意味に於て十年一日の如く、何の仕出たしたるとなき、教會も、牧師も、傳道者も、皆な復活節の新鮮なる空氣を吸入し、爽快なる進歩の活力を養ひて、生ける仕事を尋ねよ。何ぞ區々死し者にのみ其の眼を注ぐや。

マクダラのマリア已か名をよはるゝに至り遽かに心付きてラポニと呼ぶ譯ば即ち夫子なり。彼は其の喜びの餘り、前後不覺の涙に咽ひ、耶蘇に縋り付かんとせり。主曰く、我に觸るゝ勿れ。未だ父の許に昇らざるなりと。基督教は進歩なり。信仰も亦た進歩なり。福音の道は開發なり。成長

なり。マリアは今や一轉歩して復活の基督を信じ、神の右に座して、世の終りまで我等と共に在る可き神の子に事ふるものとなるべき時機に際會せり。此の新陳交迭の場合に臨み、尙ほ昨夢を破り得ずして昔の關係を維持し、舊態を固守して其の志を遂げんと欲す。是れ復活の趣意に非るなり。基督は世を去り、天に昇り、曾て世に在りし時よりも大いなる力を以て人を救はんとす。今は古へに非ず。之れを辨まへずして尙ほ古への如く主に觸れ、五官に便りて其の渴を癒さんとするは陋なり。頭迷なる神學者の如きも、思想の進化に心付かずして、唯だニカヤを語り、オウグスベルグを談じ、ウエストミンスターを説きて餘念なく、之に非れば蒼生を如何せんと、の杞憂をなす。之をマクダラのマリアに比ぶれば、更に陋なりと謂はざる可からず。何ぞ死者のうち、生者を尋ねるとを

喜ばしきイーストル

主實に復活りぬ。此の信仰に由りて、基督の教會は立てられたり。吾人の望み、人類の將來は、此の事實の有無に由りて、非常なる影響を被ふらざるを得ず。

復活の如き神奇なる事起るべからずとの反對論は、人智の分限を超過せる臆断なり。上帝存じ、靈界の理法儼然として立ち、萬物の進化、自然界の變動は、疑々乎として、天國の設立を促がせり。見ゆる世界は見えざるの世界より來る。佛氏此理を首肯し、スベンセル氏之に唱和し、有神論者之に據り、基督教徒も之れを根本として、其の信仰と希望とを堅固にす。然るに世界の成立、斯の如きをも顧みず、妄りに超自然の事實を拒絶せんとするは、抑も淺慮の至りと謂はざるべからず。故に基督教に反抗す

るを以て有名なるハックスレイ氏の如きも、道理上より絶對的に奇跡を拒絶することを非とし、唯舉證の一點より之に反對せしに過ぎざるなり。奇跡は本來信ずべからざるものなりとの斷言は到底維持すべからざるものなり。詮ずる所、奇跡の議論は舉證の一點に歸着せざるべからず。若し夫れ舉證の點より觀察すれば、基督の復活の如く明白なる歴史上の事實蓋し少からん。單に復活てふ事實のみにてありたらんには、之を疑ふこと今日の如く甚しきものあらざりしならん。左れども復活を信ずるときは之と同時に基督教を信ぜざるを得ず。果して主の復活を以て確實なる事實なりとするときは之を認めて神の子と謂ひ、我を折り己れを棄て、之に事へざるべからず。約めて言へば復活を信ずるに至るときは、其の心意の傾向を全く一變し、舊慣を棄て、或る場合に於ては、素志を放擲し、自ら謙遜りて基督の臣僕とならざるべからず。吾人は單獨に復活てふ事實を信ずること能はず。此の信仰のうちには基督

救の信仰を含蓄せり。之を信じつゝ福音の眞理を顧みざること能はず。復活に反對するてふ城砦を撤去すれば結局基督教の信仰を杜絶することを得ざるなり。復活を信なりとするの一事關する所是の如く廣く且つ深し。是を以て舉證の勢力は道德上拒むべからざるものあるにも拘らず復活を疑はんと欲するは世人の知らずく陥るところの過失とす。

蓋し靈なる意義を含蓄することは是の如くに深き基督の復活の事に付きては唯だ智力を以てのみ論ずべからざるものあり。吾人の意志亦大いに之に與かるるところあるなり。意志は無我無心にて智力の處置を觀察するものに非ず。其の狀宛かも專制政府が國事犯を處斷せんとする法院に於けるが如し。動もすれば之に關涉して自らの意に適する宣告を下さしめんと欲す。宗教上の研究に於ては意志と智力の關係最も困難なりとす。之に處するの道正しきを得るときは基督教の眞理皎々と

して心胸を照らし、信仰の念頓みに起るべきなり。所謂聖靈の證とは、是の如く大關係ある意志の所向を一變し、眞理を正面より觀察せしむること非ずや。

耶蘇基督は今週の金曜日に磔殺せられたり。天地之が爲めに悲慟し、日月之がために暗らし。此の儘にして墓中に朽ち果てんか、其の生前に在りて自ら許せし所は、大言壯語たるに過ぎざるべし。眞正の義人此の儘にして止んか、道德上の秩序何所に在りや。此の聖なるもの腐朽すべき道理なし。故に其の死骸に一百斤の沒藥を塗り、面部手足とも悉く白布を以て幾重ともなく巻きたるにも拘らず、主は三日を経て日曜日の朝墓を出で、其の門徒に現はれたり。是れ豈に重傷を負へる昏睡者の能する所ならんや。羅馬の衛兵警固すること甚だ嚴かなり。誰か能く其の死骸を竊まん。また門徒の如き性行の人何のためにか之を盗み出すことを思ひ立つべき。若し基督實に復活せず、其の死体依然として墓中に

存せしならば祭司長其の他當路の人々は論より證據最も確實なる證據に訴へて風説の蔓延を防ぎ、妄信者の夢を破るの最大利器を手に握りつゝありしなり。何故に之を舉示せざりしや。一人ならずして數人、僅々數名ならずして數百人が一回ならずして數回死後に耶蘇を見て、其の音容に接したるは皆な夢幻に過ぎずとするか。基督の門徒が天下に福音を傳ふるや、其の主として説く所は復活にてありき。彼らは血を流し身を殺して、此の事實の保證人とはなりしなり。此の如き信仰は偶然にして起るものに非ず、薄弱なる基礎に立つべからざるなり。主は日曜日、於て五回其の門徒に現はれたり。マクダラのマリヤ園中にて之を見、また他のマリヤ及びサロメどもに之を見たり。間もなくペテロも耶蘇に見えたり。午後に至りクレオパ等これに接したり。晩に使徒等はトマスを除きて皆親しく之に見ゆるを得たり。此のうちに至り主は六回門徒の前に出現せり。蓋し福音書に記載せし外にも基督は尙ほ數回

門徒等に現はれしなり。此れ豈に虚妄ならんや。歴史の一大事實たる救會否な基督教の根據とも云ふべき復活、豈たト夢幻ならんや。主實に復活れり。正義は終に勝を得んこと疑ふべからず。吾人の靈性を救ひ、吾人を天國にまで導くことを得べき基督は現に生きて働らきつゝあるなり。人類の望み多くは枯死するに至る。嗟、陀たり白髮の年形影互ひに相隣れむ。宿昔青雲の志、今何所に在りや。人間世界は希望の墓地なり。然れども主實に復生れり。人類の歸趣之がために明かるく、理想の世界定かに見え、現今の生命意趣分明なるを得。希望の墓地たる人間世界に於て死すべからざる活潑々の希望を生ずるの力あるものは、其れ唯基督の復活なるか。他人を教へて自ら棄てられんことを恐れしものはパウロなり(前哥林多九ノ二七)。基督を死より復活らしゝものは爾らに住む所の其の靈を以て爾等が死ねべき身軀をも生すべしと云へるもまた此れパウロ彼れ自身なり。あゝ次の日曜日、此の生ける望みの根據たる

主の復活を記念するの日なり。乞ふ我らもろとも之を謳はん。

基督の復活、人生の復活

主まこと避れり(路加傳二十四ノ卅四)

櫻花三月胸中の春最どのどかなる今日、イーストルの祝日を迎ふるは眞に喜ばしき心地す。此の會堂も平生に似氣なく花卉の飾り賑やかに、來會者の精神も何となく引き立つが如く感ぜらる。風塵の中に栖々として世の煩ひに俗殺せられんとする我等の心も今日の祝意を表するに當り庶幾くは基督復活の力によりて、各自の精神を爽かにし活ける望みを増し、人生の陳套を去つて、基督に於ける其の新鮮なる側面を見らんとを得ん。

基督の死は其の門人等をして呆然爲す所を知らざる失望の境遇に陥らしめたり。クレオバと他の一人が言へるとは他門人らの心事をも代表するに足る。曰くナザレの耶穌は神と萬民の前に於て、行と言に大いなる力ある預言者なりしが、祭司の長と有司等之を死罪に付して十字架に釘けたり。我等イスラエルを贖はんものは此の人なりと望みしものをも、其の状宛かも手に持てる珠を奪はれたるが如し。耶穌を愛する女たち七日の首日昧爽に之を葬りたる墓に詣りしに、主の屍を見ず。之かために狼狽へ居りしに輝ける衣を着たる二人、其の傍に立ちて曰く汝等何ぞ死にたるもの、内に活きたるものを尋ぬるや。彼れは此に在らず甦りたり。基督曾てガリラヤに在りしとき汝等に語つて人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架に釘られ第三日に甦るべしと言ひたりしを憶ひ起せと死にたるもの、中に活きたるものを尋ぬ。此の故に彼等は失望懷疑の桎梏を脱するを得ざりしなり。我が國は此の

世の國に非ずと耶蘇の教へられしに拘はらず、彼等は此の世を以て其の目的となし、死ぬるものゝ世界に希望を止めて志の成就せんことを計れり、愈よ進んで愈よ足らざることを覺え、もがき急るに従ひて其の身ますます深く深き淵に沈まんとす。屍の累々たる世界にうろたへて目を天の理想境に轉ずるとせず、其の望みを失なひて勇氣沮喪せしも怪しむに足らざるなり。當年の門人等のみならず、有形界に屬することにのみ拘泥し、唯だ圈中の鹿、欄中の牛と一般なる生活をなしつゝある人は、皆な死者の中に生者を求むるの愚を學び、影を逐ひ雲を攫まんと欲するの輩なり。世道は一日も靜に休止するものに非ず、舊去り新來りて今は全く昔日と異なり、常に變遷して止まず、新陳交代して事物の滯ふるを容さざる此の世界に於て、執念くも前日の殘夢を醒さず、新らしき生命に移るとを拒絶するものは、皆な死者の中に狼狽へて生者の他に存ざるを知らざるものなり。猶太人は舊約の形式中にメサイヤを求め、

其の對外問題等の中に狼狽へて終に生けるものを棄て、基督を十字架に釘けしに非ずや。パウロの如きは初め死者の中に生者を求めたりと雖ども一朝夢破れて昨非を悟るや翻りて進歩開新の主義を執り、生者を迎へて死者をも完ふするの道を宣傳する人とはなりぬ。宗教は言ふも更なり、政治も教育も凡そ人類の歴史は生者死者の交迭をなすとなさしむるとに由て其の運命を決するものなり。門人等槍を以て貫かれ、釘を以て刺され、苦みて終に息絶えたる耶蘇の屍にのみ目を着けたり。彼等の心は墓の中に在りき、絶えたる息變りたる容貌、冷かなる肉體などを思ふときは、人生また何の望みかあらん。三寸息絶ゆるときは萬事空し、死何事ぞ。此の問題は古今思慮深き幾多の人を惱殺せしめたるものに非ずや。耶蘇世に在りしとき其の弟子に告げて曰く、我れ今我を遣はせしものに往かんとす。左れと爾等の内誰も何所へ往くやと我に問ふものなし。却つて我が此の事を言ひしに由て

愛ひ汝等の心に充てりと。此の高潔なる基督は十字架の上に全く亡び失せたるか。義の化身、人を活動せしむるの大勢力たる耶蘇の靈性は、去つて何所に行きしぞ。唯だ冷かなる屍を見る勿れ。また基督の精神盛徳を熟思し、其の成り行きを以て一大問題となさる可からず。我が赤誠を推し以て基督の靈性何所に行きしぞとの問に答へんと欲すれば、物質的のロツクに束縛せられ精神界の迷霧に遮ぎらるゝを忍び難きと感ず可し。身の光は目なり。目にして暗からば其の暗きと如何ばかりぞや。基督の如き光全消滅したらんには、世界は常闇の中に投ぜられたりと謂はざる可からず。基督の滅亡は世界の滅亡なり。基督を死者の中に尋ねるの外、其の死後に於て我等の取るべきの方針なくば、人生は悲惨極まれる絶望に沈淪せざるを得ず。若し門人等をして誠實に汝何所に行くやと尋ねるの心あらしめば、其の死後大いに發明する所ありしならん。特に復活の報に接するや、左てこそ思ふに違はざりけりとて、歡

喜雀躍之を信ぜし筈なり。然れども悲い哉。彼等はたゞ死者の中にのみ狼狽へ居たるが故に、其の心失望懷疑の深淵に沈みて、憂愁の暗府を脱すると能はざりしなり。

基督は何れに行かれたるぞ。墓は之を抑留すると能はざりしなり。彼は第三日に甦りて父の許に歸れり。曾て其の弟子に向て我いま我を遣はせし父の許に行く……即ち我が父及び汝等が父に行く、我は汝等のために所を備へば復た來つて汝等を我に受くべし、我が居る所に汝等をも居らしめん爲なり。と言はれしこと空しからず、主は實に父の許に行けり。リホテルの言へる如く、神なき人ほど孤獨なるものは無し。故に耶蘇は我汝等を棄て、孤兒とせずと言はれき。其の復活は肉躰の冷かなるも以て斷つべからざる深き關係我と神との間に存するを明かに示したり。たとひ身は死するも墓は我を永く暗雲の中に拘禁すると能はず。我等は皆な耶蘇の父又

た我等の父なる神の許に行く可きものなり。
 人は絶大なる價値を有し、又た甚だ賤しき現實の有様に立てり。彼は至高にして至卑なるもの、其の一面は無限界に接し、其の他面は蝕蝕ひ鏽腐る物質界に屬す無限の意を短かき世に寄せ罪惡の身にありながら最も美はしき一の理想界を以て其の目的となさざれば満足すると能はず彼のパスカルが人の大なるに驚き、又た其の小なるに泣けるも實に左るとにてありけるなり。人生の自家撞着は何に由りて和協一致の點に歸着するを得べきか。基督の復活は此の事に付きて光明を世界に注ぎ我等をして人生の意義を悟り、以て其の背馳矛盾の點を調和し生ける望みを抱きて各自の前程に進行せしむるの大勢力なり。パウロ曰く今基督死より甦りて寢りたるもの、復生の首となれり。アダムに屬ける衆ての人の死ぬる如く、基督に屬ける衆ての人は生くべしと肉に由りて生るものは肉なり。我等は肉慾に従ひて動き血氣に従ひて生

き功名の野心に鞭うたれて經營苦心す。我等は罪惡に蔽はれ汚穢の中に包まれて、胸中の靈明を發揮すると能はざるなり。此のアダムに屬するの人類は望みなきものなり。基督世に降りて靈なる生命力を振興し、自から新たなる人類の開創者となりて、別乾坤を設けたり。其の復活は人類をして己れが理想の確實なるを悟り死者の中を去つて生けるものを生けるもの、中に求しむ。基督の生活及び其の復活にして事實ならざれば理想上の人類は我等の空想に止まりて未だ少しも事實となりしものに非ず。我等は基督と其の復活とに於て人類の到着すべき理想の事實となりしを發見す。
 滔々たる世界皆な理想の夢を慕ひ多くは之を夢と諦らめて固陋なる現在に安んじ時に従ひ俗に諧ひ舊きに姑息して進歩の希望に充たざるもの、に非ざるなり。然れども基督の復活は我等をして新たな人類及び今の世界に勝りたる別乾坤の存在するを疑ふと能はざらしむ

基督とその復活とを離るれば理想は夢なり。基督と其の復活とを以てすれば理想は事實なり。萬物の進化は漸を以て人類に達せり。人類の歴史は其の以前に於ける進化史の説明なり。人類の歴史は基督に達して其の最も高尚なる點に進めり。基督の生命と其の復活あるに非ざれば人類の歴史は歸する所なき運動なり。其の枝繁りて葉は萎々たれども花開かず實結ばざるに異ならず。基督を度外に置きて人類の歴史を説明せんとすれば到底迷誤に充ちたる哲學に陥るの外なかるべし。基督は人類既往の歴史を説明するのみに非ず新たなる人類の開發すべき起點にして、其の充ち足れるより新天新地を現出するに至らんとす。此れ我等が其の復活に於て學ぶ所に非ずや。基督は死して葬られ、第三日に甦りて父の許に行き又た人類のために其の所を備へられたり。人生は之がために靈なる光明に充たさる。我等は復活の力を感じて靈性の復活するを覺ゆ。

主耶蘇基督の復活は我等のために限りなき生命の門戸を開き我等が自己の力を用うるに先だちて與へられたる特別なる恩寵に由りて善き志望を此の胸中に扶植し其の間斷なき援助に由りて善功を全うせしむ(聖公會復活日の祈禱文を參看す)。

復活は人生を照すの事實にして之がために我等の心大いに高尚なる點に進み、志氣膨脹増進して天に達せざれば已まず。然れども此事何を以て成就するを得べきや。我の弱點に克ち、我の卑陋なる品性を修め、我を物化せんとする惡の力を制して基督の示されし如き有様に達するとを得るは決して容易なるとに非ず。我等罪人の得て望む所に非ざるの感あり。

然れどもイーストルの意義は生ける基督を我等に顯彰す。基督は唯だ歴史的の人物に非ず。現に尙ほ歴史を作為しつゝある活勢力とす。彼は死して葬むられたれど、第三日に甦り世の終りまで汝等ととも在る

べしと明言せり。基督教の傳道は此の一言を力として開始せられ、之を確信するに由りて維持せられ、又大成せらるべきものなり。己れ一個の救ひ成就し、新たなる人類の理想を化實するも亦た此の活方に依るの外あるべからず。生ける基督は我等が靈性活動の本源なり。復活の祝祭をなすに由り、生ける基督と交通すること一層親しく且つ切なるに至り、基督の愛愈々廣く我等の胸中に注かるゝに至らんは、兄弟姉妹の共に勵み求むべき所に非ずや。

ステパノ道の爲めに證しを立て、反對者の毒手に斃れんとするや、聖靈に充され、天を仰ぎて言ひけるは、見よ、我天開けて人の子神の右に立てるを見ると、蓋しステパノは聖靈の感化に由り、主耶穌基督彼が神に事へて忠を致し、死を以て道に殉し、博愛任侠の精神終始變せざるを喜び、之に十分なる同情を與へ、限なき應援の力を蓄へて、宛かも手に汗を握り、足を爪立て、其の所爲を見つゝあるを明らかに感覺するを得

たり、生ける基督の前に在りて、觀念はステパノをして如何に心強く思はしめしよ。彼は之がため義に勇み、氣を勵まし、何所までも立派なる精神と舉動とを維持せんとを勉めたり。終に跪づきて大聲に呼はり、主よ、此の罪を彼等に負はしむる勿れと、言ひ畢つて眠りに就けり。獨りステパノ然るにあらず、生ける基督は何れの世にありても、基督信徒動機存する所、信仰之に由りて生き、品性之に由りて養はれ、大事之に由りて決し、殉教者之に由りて石の雨下するが如き中に在りて眠りに就く。

天使マリアと其の他の女等に告げて曰く、彼ガリラヤに在りしとき、汝等に語つて人の子は……第三日に甦るべしと言ひたりしを憶ひ起せよと、(路加傳二十四の六、七)之に由りて見れば、ガリラヤ湖畔風靜かに波清き邊、耶穌弟子とにも道を語りて餘念なかりしとき、彼の女たちが其の談話を聞きしのみならず、目に見えざる邊にも之を漏れ聞きしものあり。彼等が相語りし所は、天の使の耳にも達したるものと見ゆ。希伯

來書に記せる如く我等は多くの見證人に雲の如く圍まるゝものなり。我を見るもの豈にたゞ人のみならんや。靈界にも同情を寄せ援助を與ふるもの多し。我等の一舉一動は彼等が手に汚を握りて見つむる所なり。此故に凡ての重き荷と榮へる罪を除き堪へ忍びて我等の前に置かれたる馳場を趨らざるべからず。特に主耶蘇甦甦りて神の右に坐し、我等がために死せし程の愛と同情を抱きて何れの所何れの時にも我等ととも在り。主は宇宙に遍在するの活力を以て我等と交通す。目以て之を見ず、耳以て之を聞かず。然れども基督は五官に接するの存在よりも更に高尚なる存在を以て我等ととも在り。當年の門人等は目に見ゆる基督を失なひて靈にして見えざる生ける基督を獲たり。彼等は十字架以前の基督を喪ひて復活後更に大いなる基督を獲たるなり。パウロ曰く基督と其の甦りの力を知ると實に甦は乾燥無味の事實に非ず。其の存廢は信仰道德に關係する所なしと言ふ可らず。基督甦らざれば、

我らの信仰空しく、我等の希望空し。且つ我らは生ける無限の友を失ふが故に我等の愛も亦た空し。基督の復活は信仰道德の生命に大關係ある事實なり。其の存廢は宗教上死活の問題なり。希伯來書の記事は來世の力なる語を用ひ深く之を味ふべきとを教へたり。我等兄弟姉妹乞ふ今日の祝意により、たがひに基督復活の能力を我等の身に感じ之を温かに實驗せんと欲す。愛するものと死別して悲しむものは復活日の慰めを獲て心に靈なる喜びを受よ。衰へつゝある教會は此の活力に由りて振ふべし。沈滞せる傳道事業は曾て萬國に行きて萬民に傳道せんとを命じ、我何時までも汝等とともに在るべしと言はれたる基督の復活に由りて興起せよ。活ける神の實在を感ずると漸くにして薄く宗教上の生命形式的陳套に墮落し、靈なる經驗非常に低下して氷點以下に達せんとするものあらば宜しく基督の復活に由りて其の確信を挽回し、基督の與ふる喜樂に充たされ、奸惡なる世に在りて神の事業に與り、天

國の爲に邁進直進して大いに爲す所あらんを心懸けよ。誘惑に罹りて悪魔の奸計に陥らんとする者よ、復活の主は汝を見つゝあり。此の限りなき慈愛の君に對して己れの面目を保たんと欲するの志を失ふ勿れ。義に勇み己れの意を棄て、道のため世のために力を盡さんと欲するものよ。ステパノの見たる基督は今日も尙ほ活存し汝の事業に付きて同情甚だ温かなり。主まことに我らと偕に在り。

同志復活に由りて團結す

主耶蘇復活の日二人の弟子エルサレムより三里許り隔りたるエマオと言へる村に行けり。其の一人をクレオバと云ふ。彼等は何か故にエルサレムを去りてエマオに行かんとするか。其の頼みたる主死して同志生きたる心地なく、憂愁悲哀の中に沈みたりと雖も、彼等は尙ほ同情の念に繋かれ、共に心を合せて一所に集まり居たり。特に主復活せりとの説聞え群疑紛々として決せず。皆な頭を鳩め思ひ感ひて心を惱ましつ

ゝあり。あゝ此の際友を離れ群を逸して僻遠の地に赴かんとす。彼等は失望の餘り團結の氣力も衰へ、利己主義の念に引かれ孤立して獨り自からを潔くせんとするものに非ずや。信衰へ望み冷かになり、懷疑の雲に隔てられて、兄弟の團結弛み、各々其の好む所に赴きて、個々分裂の有様を呈するに至る。古今共に此の病を同うす。豈に浩嘆に堪ふべけんや。然れども復活せる主はゆくりなくもエマオに行くの途上黄昏の頃此の二人に逢ひ、其の悲しみて語り合ふところ何ぞやとの問を發し、談漸く進みて基督は此等の惱みを受けて榮光に入るべきを説き、モーセより凡ての豫言者を始め聖書に付きて之を説明せり。彼等心燃ゆるが如くに覺えしが、漸く基督の復活を確認するに及び、大いに喜びて勇氣復し、熱情起り來りて終に歩を轉じてエルサレムの兄弟に歸れり。相逢ふて彼等の談論する所は主實に甦れりてふ一事にして、歡喜其の間に充ち、同志團結して事に従はんと欲するの精神極めて盛んなり。基督の復活

は同志團結の金鏈に非ずや。

基督對懷疑者

主耶穌復活せられたる日曜日夕暮ペテロヨハネ等の徒集まり居りし所に突然耶穌現はれて汝等安かれと言へり之がため門徒の喜び一方ならざりしと知るべきなり十二徒の一人トマス何故にや其の席に居合せざりしが友人等が云々のことありしと告ぐるを聞き我れ其の手に釘の痕を見指を釘の痕に差し入れ我が手を其の肋に差し入るゝに非ずんば信ぜずと言ひ張りぬ斯くて八日を過ぎし後門徒等一室に集まりし時トマスも其の席に在り耶穌前の夜の如く現はれて終にトマスに言ひけるは汝の指を此に伸べて我が手を見汝の手を伸べて我

が肋に差し入れよ信せざる勿れ信せよとトマスは慚愧身を措く所なく非常なる熱心を以て我が主よ我が神よと言ふのみ耶穌言ひけるは汝我を見しに由て信ず未だ見ずして信ずるものは福ひなりと此に使徒トマスが耶穌の復活に疑ひを懷きし顛末と之を氷解するに至りし手續とを叙するに當り讀者が本紙第三十號に立ち反り道に進むの心得と題せる一篇を参照せられんとを望む左てトマスの人と爲りを按ずるに彼はとかく人生の暗黒なる側面を見るてふ弊ありし人なり彼は厭世的の傾向を有せしものならんラザロの死するや耶穌都に上らんとするを見他の弟子等は皆な其の結果如何あらんと危ぶめり獨りトマスは一步を進めて我等もまた行きて彼とらもに死ぬべしと言ひ放てり彼は事危険なりと思ふのみならず已でに萬事休むとの覺悟を定めたるなり其の智力鋭く事物を觀るの明人に勝るゝものありしが故にトマスは時勢と其の歸着點とを看破して斯くは言ひしな

らん。彼は疑ひもなく智力の人にてありき。然れども彼は又た熱愛の人なりしを以て、我等も行きて共に死すべしと斷言せり。彼は冷酷なる口ツクに誤まられて墮かんとしつれども、此の熱情ありしがため、終に救はるゝとを得たり。トマスは又た誠實の人、苟くも己れの心に感服せざるとは信仰を装ひて衆どもに進退するを快しとせず。容易に然りと言はず。輕々しく否など答へず。是非然諾を重んずる誠實の風あり。疑ひありと雖も此の誠實を失はざれば、永く光明に見棄てらるゝとなからん。熱愛誠實の美德を具へたるトマスも、智力の一偏に拘泥し、ロツクの明白のみを求め、特に人生の暗黒面を見るに慣れ、物の裏面を横さまより窺ふの弊に陥りしがため、先には耶蘇告別の辭として、汝等我が行く所を知り、又た其の途を知ると言はれしとき、主よ我等汝の行く所を知らず如何にして其の途を知らんやと、悲しげに言ひ出でたり。結果の成敗利鈍を問はず、唯だ己れの責任を盡して義に趣かんと欲す。

るは諸葛亮が出師の表に顯はせる大精神なり。凡そ道義、靈性の事物に付きては、結果の如何を確かめずして行く可き道を知り、從容として之に就くは吾人の務むべき所なり。アラハムが行く方も確かならざるにカルデアのウルを出でしは、志士の摸範なりと謂はざる可からず。クロムウエル曰く行く所を知らずして進むときの如く、高きに達するものなしと。此の大人の言決して我等を欺くとなし。然るにトマスは其の性癖に繋がれ、目前の境遇に泥み、自ら活ける大道なりと言はれたる耶蘇を見ながら、我は未だ行く所を知らず、奚んぞ其の途を知らんやとの懷疑説を吐きたり。又た主耶蘇復活の後、斷金の交はりをなせる友人等が信ず可き證言を與へたるにも拘はらず、彼は頑として物質的の證據に拘泥し、目に見手に觸るゝに非ざれば之を信じ難しと斷言せり。トマスが疑懷的の見解を固執するに至りし理由は、以上説く所の如くなれど、約翰傳二十章二十四節に耶蘇來りしとき、十二の弟子の一人なるテ

ドモと稱ふるトマス彼等どもに居らざりきと記載せしを玩味し來れば彼が疑ふに至りし消息を別の方面より窺ふとを得ん。トマスは人を疑ふの病ひに罹れり。人の説に誤まられ失敗せしに懲りて彼は容易に他人の言を信ぜず、孤立獨行自から驗し、自から究め、自から決し、敢て他人どもに退進すまじとの一半は善く一半は悪しき精神を形成するに至れり。約言すれば彼は傲慢なる人とはなれり。天下の人を頼みとせずして唯だ己れの意に適するに任せ、世人の言論意見に順着せざるものとなれり。智者は群衆の聲高き方に與すとの邪説實際に勢力を逞ふる世の中にはトマスの如き精神を適當に應用すると肝要なりと雖も傲然世を睥睨して自ら以て高しとなし、友人の温かなる同情に離れ、三人行けば我が師ありとの格言を蔑視し、唯だ自ら思ふとを勉めて敢て他人に學ぶとをせざれば其の弊や懷疑に陥り無神の獄に墜がれ、靈性をして餓死せしむるに至らんとすエマオの村に行けるクレオバ

と他の一人は、耶蘇の死後群を逸して獨立したればこそ、其の途上に談論する所も自づから悲しみを帯びたるなれ。トマスが當夜他の人々と共に在らざりしは何ぞや。彼は世を厭ひ、人を厭ひ、人言を輕んじて友の忠告を顧みず、孤立獨行己れが意の儘に進退せんと決意して精神上最も危険なる迷路に入りしものに非ずや。主が傲慢の念は身を誤り疑に陥りり信念を失ふの病根とす。道に志するの心を此の點に用ゐて、精神を鍛煉し靈性の姿勢態度を正うして、眞理を悟り、基督に達せんと心を懸けざる可らず。

然れども信念なきにも二種の別あり。一は馬可傳十六章十六節に見えたる如く信ぜずして罪に定めらるゝもの是れなり。此の亡びに至るべき無信は心歪みて基督を嫌ひ善を惡み、神を蔑ろにし、理想を厭ひ光よりは却つて暗きを愛すると甚だしきより生ずるものとす。一はテモテ後書二章の十三節に見えたる如く、我等信ぜずと雖も彼は誠なり、彼は

己れに違ふと能はざるなりとある即ち此れなり。此の種類の屬する無信者は道を求むる懇切にして深く理想の美を慕ひ、古聖賢の安心立命を羨み、暗涙をたれつゝ、屢々パウロの所謂未だ知らざるの神に向ひて祭壇を築づき冥々の裡に基督を尋ねつゝあれど、性癖に蔽はれ事情に制せられて、確信の青天白日を見るとき能はず。獵夫の箭に苦しめる小壯鹿の溪水を喘ぎ求むるの状あり。不幸にして無信の悲境に沈むも、後の種類は可なり。努め前の種類に屬すると勿れ。

トマスは後の種類に屬せし人なり。彼が懷疑無信の精神舉動は主のため非難せられたりと雖も、吾人は馬可の十六章十七節に、又た其後十一の弟子等食し居る時耶蘇現はれて彼等が信なきと其の心の鈍きを戒め玉へりと記載せるを記憶して、獨りトマスにのみ酷ならざるを要す。彼が無信は敢て罪なしとせず。然れども同病相憐れむの情吾人をして之とも手に握り、相携へて確信の途上に就かんことを思はしむ。

斯の如く其の群を逸し去らんとするの迷羊、孤立して獨り懐愴たる異彩を放ち憂悶の情堪へ難きトマスは、耶蘇の教訓に由りて救はれたり。約翰傳二十章二十六節に八日を過ぎし後にとあり。あゝ此の八日はトマスのため如何なる感慨、遺恨、疑惑、憂悶の八日なりしよ。孤立獨行は決して歡喜慰藉の途に非ず。彼は堪へがたき寂寥を感じたり。彼は自ら決して萬事己が意の如くせんと志したれど、左て實際に就きて之を見れば、己れは案外に愚痴多く、迷ひ多くして、識も足らず、智慧も乏しきを發見せり。彼は其の友人ヘテロ、ヨハ子等が復活を信じて意氣奮に似ざるものあるを見て、嫉むが如く羨むが如く、身を啣ち、己れを咎めて、悶へ苦しみしには非ざるか。八日間の孤立獨行はトマスをして我を折り、己れを屈し、兄弟を慕ひ、謙だりて友人の温かなる群に加はらんと欲するの念を起さしめたり。彼は八日の一日をも千秋の如く感じ

起ちつ坐つ限りなき物おもひに沈みしならん。斯くて八日を過ぎし後、
 又た弟子たち家のうちに在りけるが、トマスも彼等どもに在り。此
 あトマスも彼等どもに在り。彼は既に孺子教うべき人とはなれり。此
 に於て耶蘇來りて其の中に立て言ひけるは汝等安かれと。又たトマス
 に言ひけるは汝の指を此に伸べよ云々其の言如何にトマスの良心を
 打ちしぞ。慚愧痛恨の顔を擡げて、主を仰げる彼が胸中には懷疑の雲頓
 に露れて信念の光り一入鮮かなるを見る。彼は主よ汝は曾て世に在り
 しに異ならせたまはず。實に復活したまへりとは言はざりき。彼は有形
 の境涯を超脱せり。其の信仰は手の傷痕に目も懸けず、人なる基督を超
 えて神なる基督に達し、我が主よ我が神よと言へり。懷疑の奴トマスは
 確信の人となりぬ。其の一言には無限の慚悔感謝、尊崇、忠誠の精神決意
 を含めり。沈むと最も深かりし彼は最も高き點にまで飛揚せり。トマス
 と同種類なる懷疑者にして、彼が如く主我自大の念を折き謙だりて、人

を尊み、他の信念を重んじ、同情温かなる中に身を投せざるがため、主耶
 蘇基督の顯現に接せざるもの幾何ぞや。主は正しき心を以て道に志し、
 懷疑の暗黒裡に呻吟するものに身を現はすこと今尙ほ古へに異らず。
 唯だトマスの如く之に必要なる準備をなすもの少きを遺憾とす。

片々

靈なる光

一紳士あり。詩人テニソンと相携へて、倫敦のストランド街を歩す。或る店頭にダンテ及びゴエテ二人の肖像並び懸れり。客卒爾としてテニソンに問ふて曰く、ダンテの容貌に存して、ゴエテに見ざるものは何ぞや。聲に應じて答へけるは、神聖てふ一事のみと、神と其の世界に接したるためダンテに在りてゴエテに無き一種の靈光輝けるものにあらずや。

ヨヨルマ、エリオット、英人の容貌を批評して曰く、其の多數は泥の如き容を帯びたりと。女史の英人を評する果して其の當を得しや否やを知らずといへども、泥の如き容貌は泥の如き思想より來る。爾らが寶と傲すもの、存するところには心もまた存せざるを得ず。泥

中に精神を置くもの、容貌に天の如き光は得て之を望むべからず。靈氣うち動き、天の如き思想胸に溢れ、聖なる都城建設の偉圖方寸に湧くときは、其餘光面にも行爲にも赫灼として四邊を射るものあらん。道に殉せんとするのステパノ雲の如く群れる反對者のまへに古今の感慨に充たされ、歴史の意義を新しく發明し、天地革新の大理想を鮮やかに觀じて、その精神絶高の點に馳せたるがため、其の容貌は輝きて天の使の如くなりぬ。裏なる靈光何時しか外面に輝きしものなり。吾人基督の道を奉ずること久しといへども、多くの點に於て常に泥色を示めせるものは何ぞや。福音の大思想を味ふこと少く限りなき光に接すること稀れに、區々役々として日夜人生の泥中に蠢爾を以てのみ。昔しプリコイの悲境に沈むや、我に新たなる大思想を予へよと絶叫せり。

英嶽の絶頂に俯仰する者の容貌は自から新たならざるを得ず。地を西